

フィラスティン

PLO Magazine: Filastin Biladi

びらーでい 5



中東・パレスチナ問題の情報誌

No.18 May 1981

へ5・15 パレスチナ・デー 特集号

パレスチナ臨時政府は可能か

小林慶二 浦野起央

公開論争を
よびかける

イスラエル批判がなぜ反ユダヤなのか——宮沢正典氏に
「バランスのとれた歴史感覚」の中味——石田友雄氏に

パレスチナ問題で日本人に問う——日本共産党への公開書簡 ほか

●ルポルタージュ 帰りゆかん祖国への道 ●短編小説 密告者

村山盛忠
広河隆一



パレスチナ人の生活 — ⑦ —

—— 憩う ——



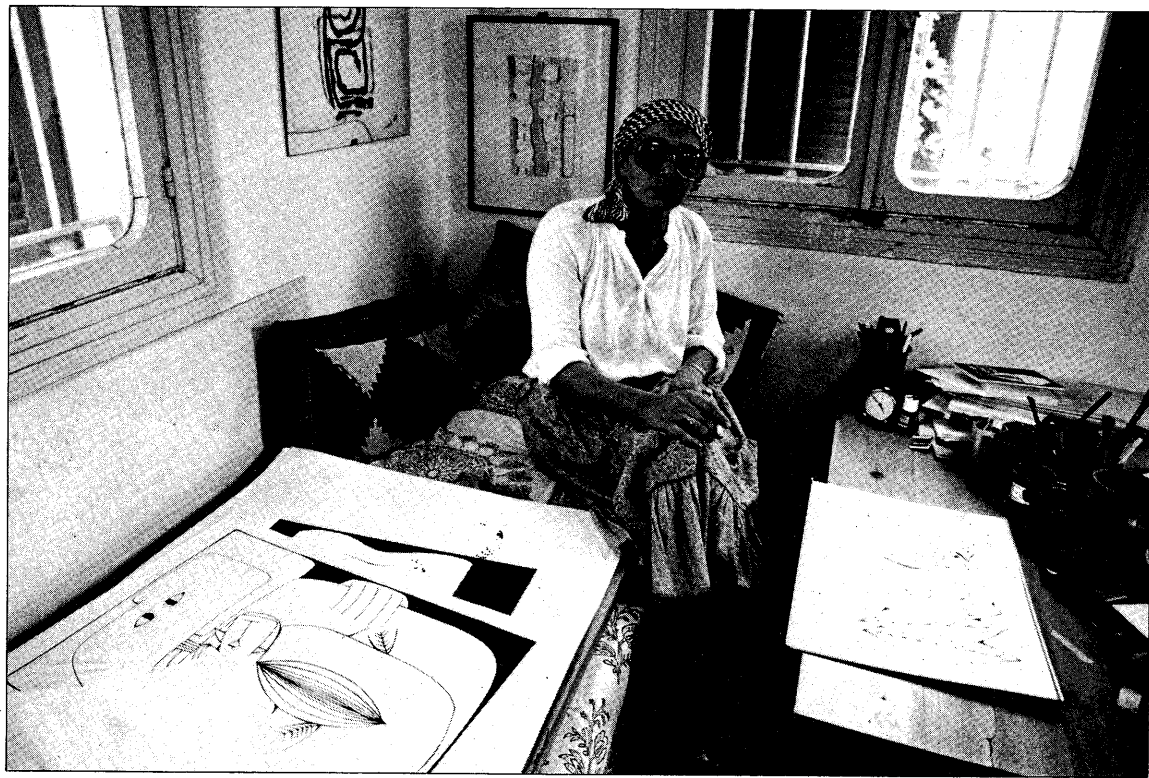
今年、国連の国際障害者年。祖国を追われたパレスチナの障害者たちは、二重の苦難にたえて、たくましく生きてきた。目の見えないモハメッドさん夫婦にも四人の健康な子供たちが生まれ、イスラエルの爆撃にもめげず明るく暮らしているある日の憩いの瞬間である。いつの日にか愛するパレスチナの大地に帰る日を夢みながら……

モナ・サウディの世界

—— パレスチナ女流彫刻家の創造する
優しさと厳しさ ——

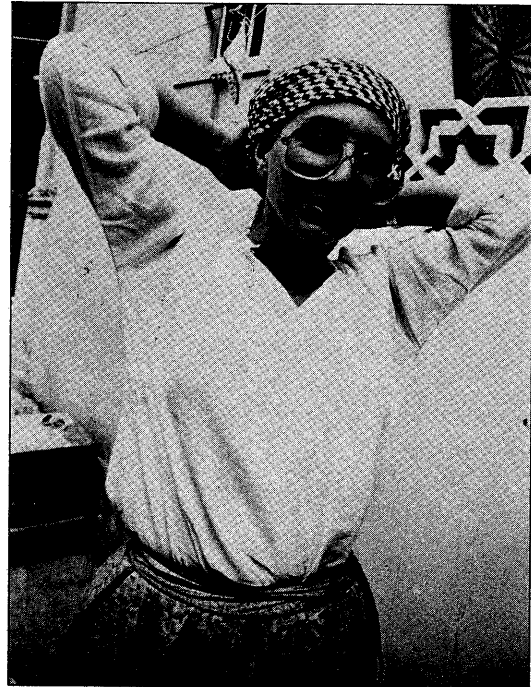
昨年九月、本誌記者はモナのアトリエを訪れた。モナはP.L.O.の造形美術部の代表で有名な親日家でもある。そのモナが今年三月五日、二十日にペイルートで個展を開いた。今年には来日するという話もある彼女の作品を、本号では特集することにした。



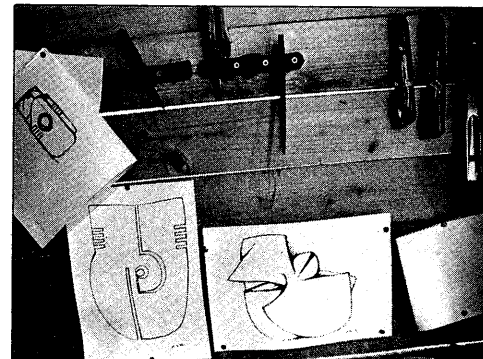


アトリエで

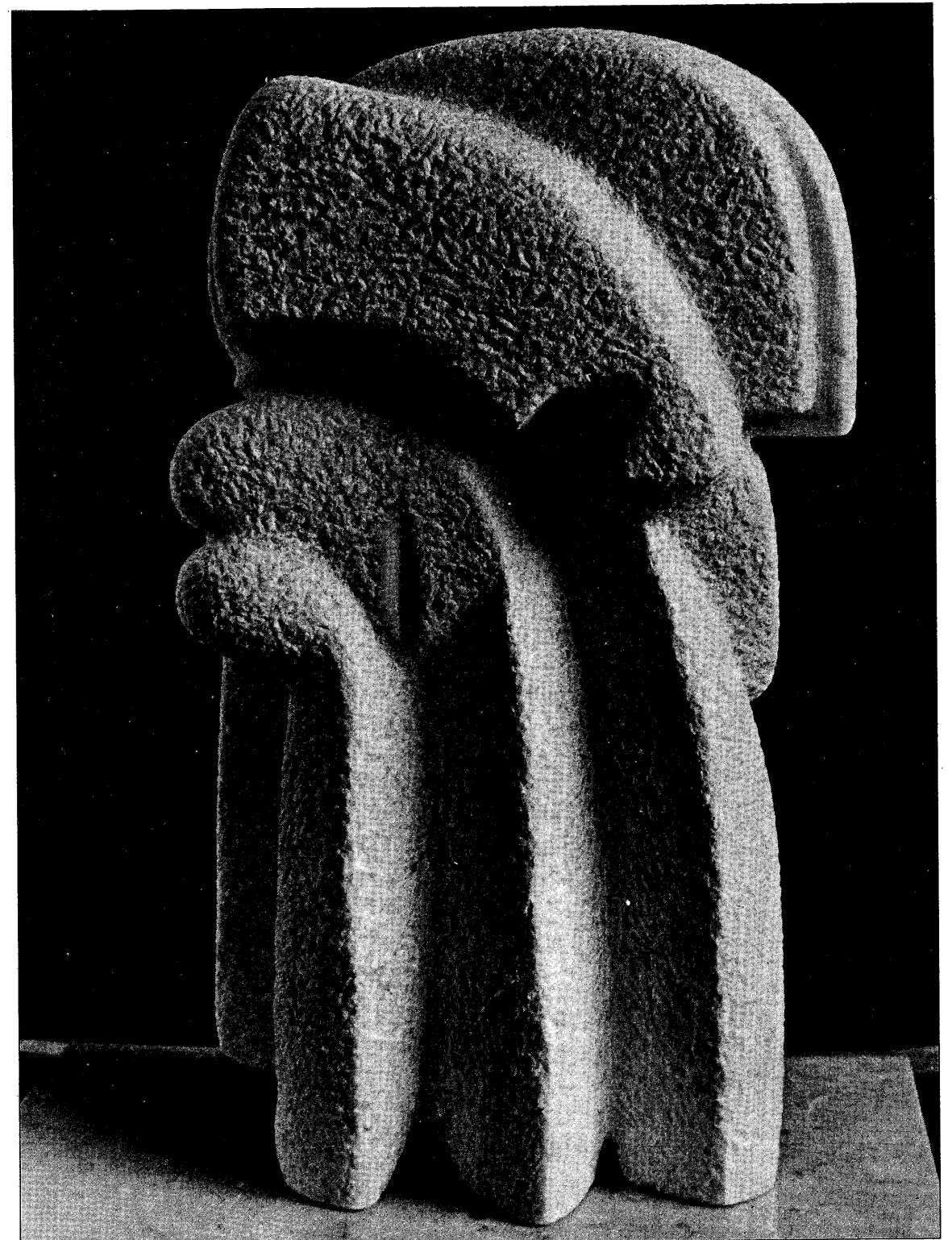
モナ・サウディは1945年にヨルダンのアンマンに生まれ、現在P L O 造形美術部の責任者である。彫刻をパリのポー・デ・ザールで学び、世界各国で個展を行なっている。



彫刻中のモナ



製作道具



〈Growth〉 1980 Marble H. 55cm



今月のことば

“PLOは分裂している。だから平和を推進できない”と欧米人たちは言う。ということは、PLOが分裂しているために（イスラエルの）占領が続くべきだというのであろうか。「PLOの傘下組織の中には過激派がいる」と欧米人たちは主張するが、そう主張している欧米諸国はどうか。イスラエルはどうか。政党政派は十五以上もあるではないか。

フィラステイン びらーでい

1981年5月号 目次

〈フィラステイン・びらーでい〉とは「パレスチナわが祖国」という意味です

〈グラフィック〉パレスチナの女流彫刻家 モナ・サウディの世界……………1

- ニュース&リポート 第15会期PNC……………6 ノルウェーの画家が見たもの……………8 シヤカー市長暗殺の動き……………8 三人のパレスチナ婦人政治図……………9 日本人にとつての「パレスチナ」……………10 真実の姿を浮きぼりに……………11

特集Ⅰ パレスチナ臨時政府は可能か……………小林 慶二……………14

PLOと臨時政府……………浦野 起央……………18

特集Ⅱ 公開論争のよびかけ……………村山 盛忠……………20

イスラエル批判が なぜ反ユダヤになるのか―宮沢正典氏に―

「バランスのとれた歴史感覚」の中味―石田友雄氏に―

……………村山 盛忠……………20

特集Ⅲ パレスチナ問題で日本人に問う……………広河 隆一……………23

日本共産党への公開書簡……………春日一幸氏への手紙……………41

ヘルポルタージュン 帰りゆかん祖国への道……………木村 郁子……………42

学生から見たパレスチナ問題②……………あるアラブ人との出会いから……………26

マルハバ／チュニジア大使夫人 ナジエット・ベン・ヤヒアさん……………銀色の亡霊④……………アラビアのロレンスとアイルランド……………鍵和田良輔……………34

短篇小説／密告者 M・ラバディ（真里みどり訳）……………30

今月の詩／祖国から引き裂かれて アブ・サルマ……………29

カセット（青野聰ほか）……………12

● 語録……………12 ● 資料案内……………45

● 押啓関係各位殿……………13 ● ダイヤル・ローグ……………49 ● 読者の声……………48

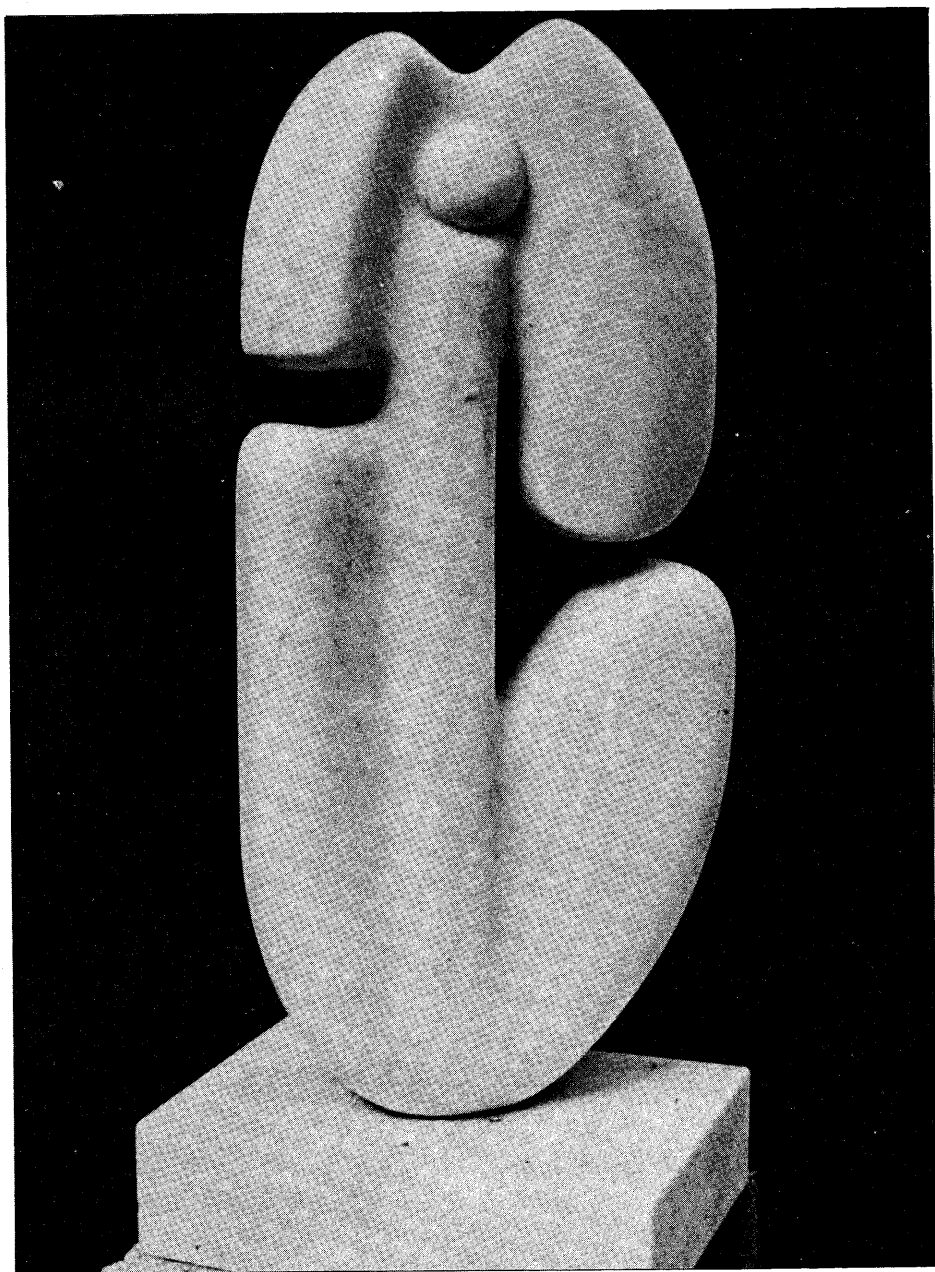
● 編集室……………45 ● インタビュー／M・A・シヤラル氏……………52

アラファト議長は語る……………51 世界史の法廷 F・アブドルハミード……………37

パレスチナ人の生活⑦……………表2／パレスチナのことものあそび……………表3……………50

ポスター・ギャラリ……………表4……………* カット カマル・ボラータ……………ほか

* 写真 長倉洋海、広河隆一、小島盛之 UNRWA * 表紙デザイン・高頭祥八



第十五会期パレスチナ国民評議会

第十五会期パレスチナ国民評議会（PNC）は、四月十一日から十九日までシリアのダマスカスで開かれ、イスラエル占領下のパレスチナをはじめ、あらゆる地域と国々に離散させられている全パレスチナ人を代表する三百二十人の代議員が出席して、前会期（一九七九年一月）から二年に及ぶ時期の活動をふりかえり、当面の中東パレスチナ問題をめぐる情勢を分析し、諸方針を決定し、新しい執行委員を選出した。また今回は初めてヤーセル・アラファト氏をPNC執行委員長としてPNCにおいて再選した。

団結を生む自由な討論

パレスチナ人民の議会にあたるPNCの第十五会期では、二日目の総会で、カドゥミ政治局長のパレスチナ革命全般の情勢に関する政治報告が提起され、これにもとづいて、自由な討論が行なわれた。

民主主義のシンボル

四日めの夕方に、アラファト議長は、三時間にわたる、国際情勢を中心に重要な演説を行なった。このなかでアラファト議長は、レバノン危機の「国際化」を図ろうとするフランスとアメリカの野望を非難し「フランス帝国主義の時代は終わった。この地域の人民のみが、自らの運命を決する」とのべた。

また、「われわれがめざしているのは警察国家ではなく、自由な人間個人による解放戦士の開かれた国家である。従っ

て、自由に意見を出し合い、討論すべきである」とことわり、アラブ情勢、ECの中東和平提案の問題点について基本的な考え方を示し、自由な討論に委ねた。最後に「現在、婦人の代議員は三十六名いる。さらに、各派の代議員が選ばれているため、パレスチナ解放勢力の内部で抗争があるかのように論評されるが、PNCこそパレスチナ革命が民主主義を貫く場である。一九七四年に十項目の暫定方針を決める時には、五百時間も討議をたたかわした。PNCでの討論は、われわれの分裂の象徴ではなく、パレスチナ革命のもつ民主主義の本質を象徴するものである」とのべた。

さらに、五日めには、政治・財務・法務・軍事・祖国などの各委員会が非公開の会議をもち、社会文化大衆組織などの委員会が設置され、これらの討論を経

て、PNCの最終決議案が起草された。政治委員会では、①パレスチナ人民内部の問題、②アラブ諸国との関係および③国際関係の三つの分野にわたって討議され、①ではPNCの各国駐在大使館、代表部、代表事務所の問題、国連パレスチナ難民救済事業機関の教育活動の問題、PNC中央評議会の開催、民族の団結の強化などの問題が討論された。②では、ヨルダン、シリア、レバノンとPLOとの関係、イラク・イラン戦争、湾岸情勢とPLOの任務などが討論された。③では、PLOに対するアメリカの敵対的態度、社会主義諸国および、世界の解放運動との関係、中東和平に関するブレジネフ提案などをめぐって討論された。

新執行委を選出

最終日には、別掲の新執行委員会（内閣にあたる）を選出した。同時に、三百二十名のPNC代議員が満場一致でアラファト議長をPNC執行委員長として再選した。このことは、従来は、執行委員会が議長を選出していたとは異なり、いわばアラファト議長の立場と権限が強化されたことを示すものである。

新執行委員の顔ぶれは、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）が復帰したところ、アラファト議長を支持する無所属の

PLO新執行部の顔ぶれ

ヤーセル・アラファト（ファタハ）
ファルーク・カドゥミ（ファタハ）
アブ・マーゼン*（ファタハ）
アブデル・ラヒム・アハメッド
（アラブ解放戦線）
ヤーセル・アベドゥ・ラッポー
（パレスチナ解放民主戦線）
アブ・マヘール*（パレスチナ解放人民戦線）
タラル・ナジ（パレスチナ解放人民戦線総司令部派）

ムハマド・ハリフェ*（サイーカ）
ハメド・アブ・シッタ（以下無所属）
ムハマド・ズフディ・ナシャニ
ービ
アブデル・ムフシン・アブ・メイ
ザー
アハメッド・シドキ・ダジャーニ
ジャマル・アル・スラーニ*
ハンナ・ナーセル*
サレフ・ダツバーフ*

（注*は新任）

著名な指導者が選ばれたこと、ファタハ（パレスチナ民族解放運動）から三人めが選ばれたことなどが特徴である。

最終日の政治決議には、パレスチナ解放武装勢力をPLOの指揮下におくことおよび総動員体制の拡大、抵抗勢力と民兵の強化と統一などに関するよびかけが含まれている。

また、教育と医療の分野の新しい方針、イスラエル占領下のパレスチナ同胞に対する支援の措置なども含まれている。

最終コミュニケ

PNCは、会期を終了してから、PNCのファウム議長は、大要次のような「コミュニケ」を発表した。

①パレスチナ人民内部の団結がかつてなく強化されたことが、今会期のPNCの大きな特徴であった。このことは、PNCの諸決議に反映されており、パレス

チナ解放のための政治・軍事・経済・社会など各分野の新しい方針にも、いかなくあらわれている。

②祖国地の外に住む全パレスチナ人が総動員よびかけに参加するよう、重大な決意をもって宣言し、アラブ諸国人民もこれを支援するようよびかけた。シリアとの同盟関係の重要性を再確認し、またレバノン情勢が、PLOのみならず、レバノンの民族勢力とシリア人民にとって極度に緊迫している点を指摘した。

③国際政治の舞台でパレスチナ問題の真の解決のために、ECの中東和平提案の動きなども含め、有効性をもちうる動きが出てくるが、これらはあくまでも、キャンプ・デービッド方式をきつぱりと拒否し、PLOをパレスチナ人民を代表する唯一・正統の代表として承認する場合にのみ有効である。

④ブレジネフ提案を歓迎する。⑤世界諸国人民と連帯を強化し、国家

テロ活動をすすめているイスラエルの国際テロを決して許さない。
こうして、PLOのもとに団結を強めたパレスチナ人民は、今会期のPNCを通じてパレスチナ独立国家樹立の具体的な準備に入った。なお、今回のPNCには、世界の九十二カ国の代表団がゲストとして出席し、三百名以上のメッセーじがよせられた。

日本からも、日本パレスチナ友好議員連盟の木村俊夫会長をはじめ、多くのメッセーじが寄せられた。日本パレスチナ友好議員連盟のメッセーじは、駐シリア日本大使館を通じてPNCに伝達され、第一日めに全文披露された。



独立国家樹立へ具体的準備

日本からのメッセーじ

第十五会期のパレスチナ国民評議会には、日本からは次の各界諸団体と個人からメッセーじが送られた（敬称略、順不同）。

日本パレスチナ友好議員連盟 会長・木村俊夫 事務局 長・山口淑子、日本アラブ協会 会長・中谷武世、日本アラブ友協会 会長・椿繁夫、日本リビア友好協会 会長・木村俊夫、日本カタール友好協会、日本チュニジア友好議員連盟 会長・安倍晋太郎、日本国自由民主党 幹事長・桜内義夫、日本社会党 委員長・竹内義勝、日本社会党 委員長・飛鳥田一雄
総評大阪評議会 議長・中江平次郎、日本社会主義青年同盟中央本部、国民外交懇話会 幹事・岡崎嘉平太・川崎寛治・木村俊夫・坂本徳松・塩谷一夫・関寛治・田中稔男・穂積七郎、高木史郎、在日本朝鮮人総連合 議長・ハン・ドク・ス、統一革命党日本代表部 代表・趙範植、日教組委員長・榎枝元文、日放労中央執行委員長・須藤安三、関西パレスチナ人民と連帯する会、三多摩パレスチナと連帯する会、アラブ文化協会、日本婦人連、日本ジャーナリストクラブ 代表・甲斐良一、同国際担当・森詠、日本A作家会議 事務局長・小中陽太郎

六月に国際セミナー

パレスチナ作家・ジャーナリスト同盟は三月二八日に開かれた書記局会議で当面の活動計画について検討し、ソ連、ベトナムなど社会主義諸国との代表団の相互訪問、友好協力発展のための合意書の交換など最近の活動をふりかえり、あわせて六月にベイルートで開かれる予定のパレスチナ問題国際シンポジウムの開催などについて協議した。また国際ジャーナリスト機構への役員として同盟からスライファ・ヒジャウィ氏を推せんした。さらに、レバノンの作家同盟や同ジャーナリスト協会との協力のもとに、国際セミナーなどの準備を強めていくことも確認した。

チェコ共産党大会

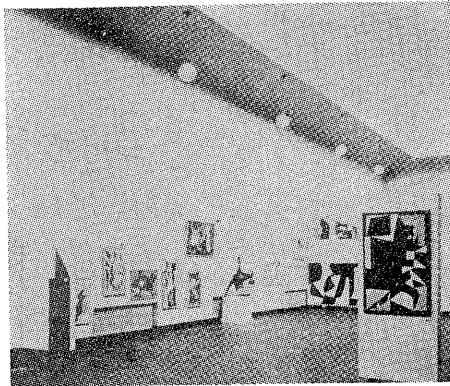
チェコスロバキア共産党の第十六回大会にパレスチナ代表団が招かれたが、最終日の四月九日に、マジッド・アブ・シャール氏（ファタハ中央委員）があいさつを行ない、たまたまパレスチナ人民の決意をのべ、両人民の連帯をたたえた。シャール氏は、あいさつの中で、アメリカが依然としてイスラエルを支援して中東の権益を守ろうとする政策をとっているため、社会主義諸国との連帯がパレスチナ解放の事業を推進するうえで大きな支援になっているとのべた。

ノルウェーの画家が見たもの

ノルウェーの美術家代表団が二月にPLOの造型美術部を訪問したが、いまノルウェーでは十一月の大規模なパレスチナ現代美術展の開催準備がすすめられている。

団長としてベイルートを訪問した画家でオスロ美術館館長のソーンシュタイン・リットン氏は、パレスチナの現代美術について次のように感想を語った。

「想像していた以上に多様な作品があった。政治的なモチーフが多いように感じたが、現代美術は政治的なものではない。パレスチナの独自の文化がないと言う人がいるが、私が見たのは全く逆で、民芸品や民族衣裳は、すぐれたパレスチナの文化の代表であった。パレスチナ現



代美術展をオスロで開催するのも、困難な状況のもとで美術を通じてのたまたかいがすすめられていることを示すためである。

PLOの造型美術部門では、すぐれた画家たちに出会った。こうしたすぐれた画家たちを擁するパレスチナとの友好と協力が重要な意味をもつ。

オスロでの現代美術展には相当の妨害や中傷も予想されるが、本当にすぐれた作品を展示すれば非難も出来まい。オス

シヤカー市長暗殺の動き

イスラエルの婦人弁護士でイスラエル当局による人権侵害を告発する活動をつづけてきているフェリス・ランゲル女史は、三月二十三日の記者会見で、ナブルスのシヤカー市長を抹殺する動きが依然として続けられていることを明らかにした。

ランゲル女史によれば、このところナブルスの市役所の職員は、あいついでシヤカー市長宅のまわりに穴が掘られたり電線や電気装置などが仕掛けられてい



るのを発見したという。このことは、シヤカー市長を暗殺するための新たな動きとして軽視できないものである、とランゲル女史は語った。

またシヤカー市長だけでなく、最近ではシヤカー市長の友人や市役所の幹部に

アンカラで美術展

三月三十日はパレスチナの記念日の一つである「土地の日」。この日を記念してイスラエル占領下のパレスチナの内外で各種の行事が開かれたが、トルコのアンカラ市では三月二十六日からパレスチナ現代美術展が開かれ注目をあつめた。これはトルコ駐在のPLO代表部が主催したもの、多くの市民が訪れ、マスコミで好評を得た。

一方、チュニスでは、パレスチナ児童舞踊団が公演を行ないチュニジア国民の熱狂的な歓迎を受けた。この舞踊団はPLOが運営している教育機関の一つであるエスアド・アルハットウアラ学校チームであり、好評にこたえて四月上旬まで公演を行なった。

イタリア国会調査団

このところヨーロッパ各国の国会議員の調査団があいついでレバノン南部とPLOを訪問している。

三月上旬にはイタリアの国会議員調査団(十三名)がイスラエルの爆撃がめめられた時期にレバノン南部を訪問。三月六日にはアラファト議長と会見した。

その後、ロンドンの病院で治療を受け両足を失ったままで、今年一月にナブルスにもどり、市長の仕事に復帰していた。「シオニストは私の両足を奪った。祖国パレスチナに張ったおれたちの根っ子を奪えない」と宣言し、PLOがパレスチナ人民の唯一正統の代表であると断言するパレスチナ人の指導者はイスラエル当局にとっては、依然として抹殺の対象となっている。

また四月八日には、事態を重視してシヤカー市長がイスラエルの軍事占領当局に抗議した。いわゆる「国境警備隊」が最もしつこくナブルスの市民に妨害を加えており、占領軍の軍用車が連日連夜、市庁舎を見張っていることを指摘した。

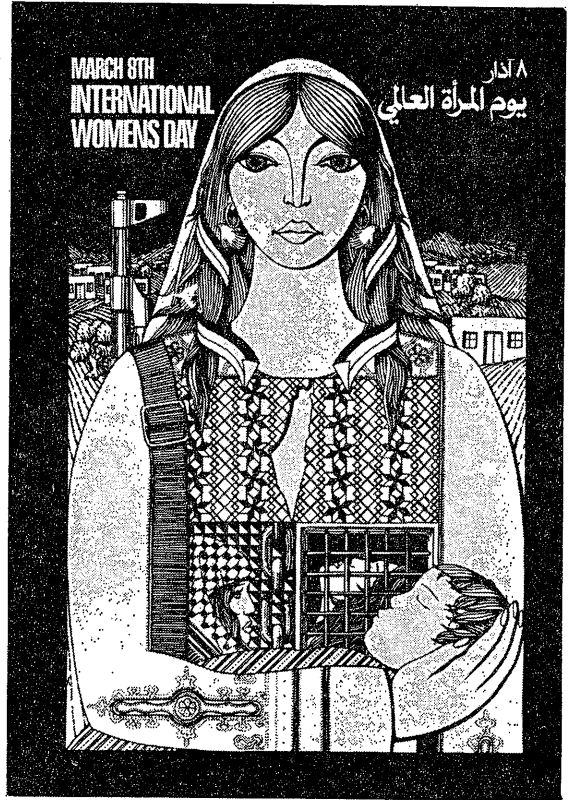
祖国を愛することが罪

イスラエル軍事当局によって逮捕され投獄されているパレスチナ人の政治囚は六千人を超える。四月十七日は昨年設定された「政治囚の釈放をめざす日」。

このほど西岸地区のラムレの近くのネブ・ティルザ刑務所に投獄されている三人の婦人政治囚に面会したパレスチナ人弁護士のリッド・アル・フアフウム女史の報告が公表された。

三人の婦人政治囚の中の一人は、テレズ・ヘルサさん、エーカーの出身で一

今年の国際婦人デーのためにつくられたパレスチナのポスター



九七年五月八日に終身刑を宣告された。理由は「パレスチナ民族解放運動(ファタハ)のメンバーであること、ブラック・セプテンバー(暗黒の九月)の隊員でサベナ航空機でイスラエルに不法入国したこと」。

二人めは、ズーハ・フレータさんでナブルスの出身、一九七九年五月二十三日に三年半の懲役刑を宣告された。手榴弾を隠していたためというのが逮捕の理由だ。以前に、ナブルスでデモに参加した

という理由で、また手榴弾の製造の訓練を行なったという理由で五十日の刑に。

三人めはイマン・マフムド・アブ・ハテルさん。一九六五年生まれ、トゥルカレム出身。ファタハのメンバーで爆発物を所持していたことを理由に、昨年十一月三日に逮捕され、三月下旬に刑が言い渡されることになっている。彼女の兄も同様の理由で逮捕され、一年間の刑を終えて、このほど釈放されたばかり。彼女の父ともう一人の兄も、彼女との関連で一ヵ月以上にわたって拘留されたという。

三人のパレスチナ婦人政治囚

学生たちが逮捕

一九四八年四月九日の未明、エルサレム西部郊外のデイル・ヤシーン村の二五四人のパレスチナ人たちが虐殺された。この日から三十三年。

イスラエル占領下のナブルス市で四月九日に、デイル・ヤシーンの大虐殺に抗議してデモを行っていた学生たち五十人がイスラエル軍事当局によって逮捕された。

学生たちのデモを阻止しようとした軍隊と激しい衝突がおこった。またカドリ・トラカン高校では学生たちが抗議の坐り込みを行っていたが、イスラエルの軍隊が高校を襲い、催涙ガス弾や威圧弾を発砲して坐り込みを解除させようとした。

ラマラとアル・ビレフでは学生たちの抗議デモが包囲され、十人の学生が逮捕された。エルサレムでは、抗議デモが軍用バスや装甲車をおそったため、イスラエル軍事当局は、夜間外出禁止令を出したが、学生たちのデイル・ヤシーン大虐殺に対する抗議は西岸地区の各都市でくりひろげられた。

日本人にとっての「パレスチナ」

東京ではシンポジウム

五月十五日のパレスチナ・デーに日本人の立場で中東・パレスチナ問題を真剣に考えてみようとする各種の行事が行なわれる。

東京では、五月十六日にパレスチナ連絡会議の主催でシンポジウムが行なわれる。テーマは「パレスチナ難民の苦難」で、基調報告は、「パレスチナ難民化の過程」(黒田美代子氏)、「パレスチナを追放されて」(モハメッド・S・ハミース氏)、「パレスチナ難民キャンプの今日的意義」(森詠氏)。司会は、牟田口義郎氏。

パレスチナ・デーとは

五月十五日はパレスチナ・デー。一九四八年のこの日パレスチナに「イスラエル」という国家が設立された。パレスチナ人たちにとって、この日は独立記念日となるべき日であった。しかしイスラエルが設立されたことによって、パレスチナは地図から消し去られてしまっただけでなく、

パレスチナ人たちは祖国の地から追い出されてゆく。苦難の序章である。

それ以後五月十五日は、「パレスチナ・デー」として、苦難の日の開始を祖国の地の解放という勝利の日に転ずるための日として守られてきた。今日では、十一月二十九日の「国連パレスチナ人民連帯デー」とともに、世界各地でパレスチナ人民のたたかいに連帯する日となっている。

大阪でも集会

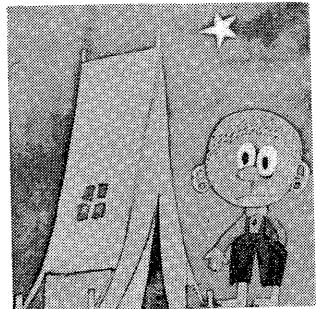
大阪でもパレスチナ問題にとりくんでいる関西パレスチナ人民と連帯する会の人たちが中心となって各界によびかけ、五月十六日に集会を行なう。

昨年八月にテレビの取材でPLOを訪ねた関西テレビの中沢隆司氏を講師にPLO取材の体験で感じたパレスチナ問題を報告してもらい、日本人の立場から問題を深め合う。

パレスチナ・デーに考える

いで確認しあうて行くべきです」とこの集会の準備をすすめている村山盛忠牧師はよびかけている。

船橋市ではアラブ・フェアと講演会



国際問題の焦点である中東とアラブ世界の問題をどう考えるか

ればよいのか——このテーマに真剣に取り組んでいるのは千葉県船橋市の青年会議所(伊藤吉之助理事長)のメンバーの方たち。

交通遺児の福祉のために、「ささなか募金」に取り組んできた同青年会議所は、一九七〇年にも中東問題を考える大集会をもったが、今年は、中東問題に本格的に取り組んでいく。

五月十五日から二十日まで四月にオープンした「船橋ららぽーと」でアラブ・フェアを行なうほか、同十七日には、宇

年刊「パレスチナ」連絡会議が発行

年刊「パレスチナ一九八〇年」が五月十五日(パレスチナ・デー)に、パレスチナ連絡会議から発行される予定。

前半は九部より構成されており、中東・パレスチナ動向をテーマに、十数名の研究者、ジャーナリスト等によるパレスチナ研究会報告および問題提起が収められている。流動化するイラン情勢(川本和孝)、キャンプ・デービッド体制の行方(島静一)、エジプト経済(三原一潮)などのほか「パレスチナ解放運動のめざすもの」という統一テーマを掲げた7・26公開パレスチナ・セミナーでの小田実、いいだも、芝生瑞和、アブドルハミッド各氏による発表がその内容である。

さらに、エルサレム問題後のパレスチナ・中東情勢(岡倉徹志)、イラン・イラク戦争のインパクトを分析した中東情勢論(小林慶二)をはじめ、「イスラム、パレスチナ、および日本」を統一主題とした11・30公開パレスチナ・セミナーでの発表(アメリカの

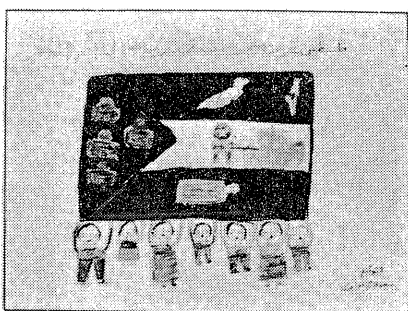


広河隆一写真展
パレスチナの人びと
PALESTINIANS by Ryuchi Hirokawa

芸品、民族衣裳や写真などが展示される。入場料は一般五百円(団体三〇〇円)。午前十時から午後四時半まで。

た写真が中心だが、十数年に及ぶパレスチナ取材のなかから蓄積した豊富な写真の中から選ばれた数十枚の写真は、パレスチナの人々の真実の姿を見ごとくまでに浮きぼりにしており、好評をもって迎えられる。

広島展を訪れた一市民は、「パレスチナの人たちが苦難の中でもたくましく生きていく姿に感動しました。ヒロシマと



どこかでつながるように思います」と語っている。

また四月十七日には広島市でパレスチナ問題の講演会が行なわれたのを始め、四月二十四日には島原市で、同二十七日には福岡市でも、広河隆一氏を招いて講演会がもたれた。

都宮徳馬氏や山口淑子女史らを講師に招いて市民の寺小屋(講演会)を開催する。後援は、船橋市商工会議所、同市教育委員会と読売新聞社。また十七日の講演会には駐日アラブ各国大使代表、PLOとアラブ連盟の駐日代表らが招かれており、同日夜には、商工会議所主催の歓迎レセプションがもたれる。

国際見本市に

PLOが参加

第一四回東京国際見本市が、東京晴海で開かれるが、アラブ十カ国とともにPLOも参加することになった。四月二十八日から五月七日まで開かれる国際見本市には世界五十一カ国が参加し、世界の観光・文化を紹介する。

PLOコーナーでは、パレスチナの民

真実の姿を浮きぼりに



世界戦略におけるパレスチナ(ファトヒ・アブドルハミード)、イスラム世界におけるジハードの歴史的概念(湯川武)、日本の教育におけるパレスチナ(吉田悟郎)などが載せられている。一九八一年パレスチナ状況では日パ協議連会長の木村俊夫氏、アラブの連盟駐日代表カリール・アズハリ氏による講演の全内容を収録。

後半部分には、S・アカラ氏(国際問題研究家)、ローヒ・アル・ハティブ氏(エルサレム市長)、ジャマル・ナーセル博士(元ヨルダン法務大臣)の特別報告や、「パレスチナ国民憲章」、「国連パレスチナ緊急特別総会決議」等の資料や、パレスチナ問題年表が掲載されている。

B5版二〇〇ページで価格は二、〇〇〇円(送料実費)。御希望の方は、はがきで同連絡会議(東京都世田谷区野沢三十四ー一八四一)小林方)までお申し込みを。

パレスチナ人は、自分たちを「難民」とは呼ばない。手もとの辞書を見ると「難民」は「戦争・天災などのため困難に陥った人々。戦禍・政難を避けて流浪する亡命者」で、人間のある悲劇的な状態を表している。助けを乞うイメージが強く、たとえば餓死者が続出するアフリカの難民にとっては、それは能動的な、とりうる唯一の行為と言えるが、これからどうするという未来に向かう姿勢のとり方は含まれていない。

パレスチナ人は歴史の様々な局面でつかわれてきた「難民」を拒否して自ら「リターナーズ」と呼ぶ。訳せば「還りゆく民」となる。もちろん還りゆく先はイスラエル建国によって離れさせられた母国パレスチナ。政難を避けて他国で生きるをえなくなった人々が母国へ還りたいと願うのは本能的なものだ。

パレスチナ難民の発生の仕方が特殊だったからと言うのは当たらない。国の創られ方がそれぞれ特殊であるように、難民の発生もそれぞれ特殊である。強靱さとは、いわば文化の厚みに由来する。考えてみれば、パレスチナ人が「還りゆく民」となっているから三十年が過ぎ、現在の若者はみなキャンプで生まれている。親子二代の感性を占めている母国と、今のキャンプ生活。この摩擦が自分たち専用の言葉を見出し、要求する。そういうものだ、言葉は。毎日新聞一九八一年四月十七日夕刊「視点」



語 録

一人でもある。
やがて世界は、パレスチナ・アラブ人たちに加えられた行為が人類の名において、また平和のために改めらるべき重大な不正であると見なすに違いない。
——ジョン・H・デービス

ジョン・H・デービス

一九〇四年にアメリカのミズリー州に生まれ、教師、農業次官などを経て国連パレスチナ難民救済事業機関の初代事務総長として活躍した。アイオワ州立大学とミネソタ大学から修士と博士号を受けている。

話し合いは有益
鈴木 善幸（内閣総理大臣）

中東の真の平和を実現いたしますために、パレスチナ人の問題を抜きにしてはその実現は困難であると、このような政府の認識、考え方は、いま外務大臣から申し上げたとおりでございます。私は、そういう意味合いで、PLOが国家ないし政府とは日本政府は見えておりませんけれども、やはり中東の平和の重要な当事者としては、その主

張、考え方、要求というのは十分会議に反映をされなければならぬものだ、こう思っております。

したがって、アラファト議長が日本にお見えになった場合におきましては、私も議長と中東和平の実現について話し合いをするということは有益であろうと、このように考えております。

——参議院予算委員会議事録
（一九八一年三月十一日より）

国旗と見ない

伊東正義（外務大臣）

PLOというのは、これは岩動さん御承知のとおり、国家ではないわけなんです。ね。それで国旗というのはやっぱり国家を代表して掲げられるものでございますから、私はそれが掲げられたということはPLOの立場が変わったということではない。またそれは国旗だというふうには私たちは見ていないということでございます。

——同上議事録より



パレスチナ難民問題とのかわりによって、彼はシオニズムこそが紛争の根源であると確信し、イスラエルの非シオニズム化を唱えてきた。著書に「ごまかしの平和」ほかがある。

バートランド・ラッセル、アーノルド・トインビーらとともに早くから彼はシオニズムを批判した。

オピニオン・リーダーと言われる指導者たちの発言や見解をどう受けとめたら良いのかは、発言や情報の受け手の魂が純粹であればあるほど迷うものである。日本の一般大衆にとって、最近この種の問題として注目されているもの一つに、テロリズムの問題がある。

に……
二十世紀の半ばまでの世界史の歩みをふりかえってみると、「解放の世紀」と言われる、この時代の旗手たちは、外国の侵略や占領とたたかったことによつて民衆の尊敬と信頼を勝ちえた指導者たちであった。これらの民族解放の先駆者たちも何度となく宗主国の支配者からは「テロリスト」というレッテルをはられたことは、あえてふれるまでもないであろう。

いたくなら、アメリカが、われわれをテロリストとしてレッテル張りをするのはわかるとしても、日本も含めたアメリカの同盟国まで、何故にアメリカの言い方をまねるのか。
日本が中東政策においてまで、アメリカに従わなければならないのは何故だろうか。しかも、日本側の発言には、常に二つの相反する態度が同居しているのだ。「PLOはパレスチナ人の有力な代表である」という。レーガン政権との話し合いでの対応から考えると、日本側の意味するところは、こうなるらしい。つまり「PLOがパレスチナ人の有力な代表であるのは、パレスチナ人たちが公的に代表する機関であるためではなく、テロ活動を行なう組織だからである」と。もし、それが真意であれば、なぜテロリスト組織と関係をもとうとするのか。

拝啓

関係各位殿

PLOから敬意をこめて

「テロリスト」と呼ぶ人たち

パレスチナと日本④

でもあるからである。

ところが、現実の国際政治の中では、こうした合法的な権利に対して、政治指導者たちが情況に応じて勝手に定義づけを行なうから、民衆は困惑する。つまり、ある時は、当然の権利としての「抵抗」であると言ったり、またある時は、「テロ活動」だと言ったり。しかも、自分たちの権利は疑いもなく保障されるのが当然であるのに、他国人民の権利の擁護は一切まかりならんとも言ふ。かつて、ローマの平和が全てであると信じた専政君主たちのように、パックス・アメリカーナを唱えた時代は、終わったというの

のアメリカの輝やかしき伝統とは、ヨーロッパの植民地主義者たちもたたかった、自由の戦士の「新世界」の伝統である。そのアメリカが自由のためにたたかっている者たちをテロリストとレッテル張りするのはなぜなのか。

アメリカは、他国を支配する植民地主義・帝国主義国家となつていったために、世界の多くの支配地域に、カイライ政権を擁し、諸国人民の意思に反して世界を支配してきた背景や実態を考えれば、その理由についても、なるほどとかなずけるものがある。

たされるのは必至である。
六十数年の民族の抵抗の歩みが、つくりだしてきた現実を、テロリスト呼ばわりをした二カ国政権の外交担当者たちが、どのように認識し

特集Ⅰ

パレスチナ臨時政府は可能か

小林 慶 二（朝日新聞外報部デスク）

新聞紙上で、最近ふたび、パレスチナ臨時政府（新聞によっては亡命政府とか暫定政府とか呼ばれる）がとりざたされてきている。そこで本誌ではこの問題について、朝日新聞の小林慶二氏に、ハミッド駐日代表からの取材を含めて、まとめていただき、あわせて日本大学の浦野起央氏にコメントをお寄せいただいた（編集部）。

カンボジアの例とサダト提案

最近、いわゆる亡命政権の樹立をめぐり、二つのニュースが伝えられた。ひとつは、シアヌーク殿下を中心とするカンボジアの反ベトナム政権樹立構想でありもう一つは、中東和平の核心といわれるパレスチナ人の亡命政権である。

前者は、東南アジア諸国連合（ASEAN）がバックアップし、ベトナムが支援するカンボジアのヘン・サムリン政権を打倒できる政権をつくらうとの動きである。ASEAN諸国は、反ベトナムの立場から、こ

この構想を具体化するため民主カンボジアのキュー・サムファン首相は三月十日、シアヌーク殿下の滞在する朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の平壤を訪問し、同殿下と話し合った。結果は、ボル・ポト軍の武装解除とシアヌーク殿下に直属する軍隊設立を要求する同殿下に対し、キュー・サムファン首相がこれを拒否したため物別れに終わった。しかし、中国やASEAN諸国が、ヘン・サムリン政権打倒には、シアヌーク殿下の復活が不可欠とみている現状では、今後も話し合いは継続する可能性が高い。

一方、パレスチナ亡命政権樹立構想は、エジプトのサダト大統領が提唱したもの。サダト大統領は自己の政治生命をかけたイスラエルとの和平交渉が、パレスチナ自治問題をめぐり難航、窮地に追い込まれている。パレスチナ解放機構（PLO）に対して、亡命政権樹立を呼びかけた裏には、このデッドロックを打開しようという思惑があるのは間違いないだろう。

米国はレーガン政権成立以来、PLOを「テロ集団」と呼び、交渉することを拒んできた。レーガン政権の中東政策はまだ模索の段階で、PLOに対する対応も、最初の「テロ集団」から「一部の組織はテロ組織だ」と微妙に変ってきたが、近い将来、PLOと交渉に入る兆候はみられない。

一方、イスラエル側も、タカ派のベギン政権はもちろん、次の総選挙（六月末）で政権につくことが予想される労働党まで、PLOをテロ組織とときめつけており、パレスチナ自

治交渉に加えることを峻拒している。

サダト提案は、こうした行き詰まりを打開するためPLOとは別の組織、亡命政権を樹立させ、これを米国、イスラエル双方に承認させて、和平交渉に参加させようとのねらいとみられる。つまり、これまで拒否してきたPLOを交渉に加えるのは行きがかり上むずかしいので、PL

Oに「衣がえ」をさせようという思惑だ。

しかし、PLO側は、この提案を一蹴し、いまのところ亡命政権づくりを拒否している。なぜなのか。それを述べる前に、臨時革命政府ないしは亡命政権というものが、どんな時期、状況で生まれるかを、ざっと振り返ってみよう。

民族解放闘争と臨時政府の条件

ブリタニカ国際大百科によると、亡命政権とは、次のように定義されている。

政府の主要構成員が外国に亡命を余儀なくされその地で形成されている政権。このような亡命政権が発生するのは、革命や反革命、または侵略や征服によって、一国を支配していた政権の存続が不可能になったからである。したがって一般的にはその国における新政権が事実上の正統的政権として、漸次認可されていくか、亡命政権がなおその国の正統政権とみられるのは、新政権の定着度が疑問視されたり、外国が、政治的理由によって新政権を拒否するからである。ドイツのナチスによって占

領されたフランスにおいて、ロンドンにできたドゴール政権がこのよう

な亡命政権の典型である。歴史的にみても、臨時革命政府、亡命政権は民族解放闘争の中から生まれている。対仏独立闘争をくり広げた北ベトナムでは一九四六年、統一戦線ベトナムを中心に臨時革命政府を樹立。総選挙を経て国会を招集、同年十一月にはベトナム民主共和国憲法を採択している。しかし宗主国フランスはこれを認めず、完全に独立を達成するには一九五三年のディエン・ビエン・フーの勝利まで待たねばならなかった。

ラオスでは一九四五年、日本降伏でフランス復帰が決った際、独立派

のプーマ殿下らが自由ラオスを結成、ビエンチャンに、臨時政府を組織。仏軍の進駐により、ビエンチャンを追われ、バンコクに逃れて亡命政権を樹立している。亡命政権に参加したうちプーマ殿下はその後ラオスに帰り、首相に就任したが、異母兄弟であるスファヌボン殿下はインドシナの抗仏闘争に参加、パテト・ラオ抗戦政府を樹立している。パテト・ラオがその後、ラオスの実権を握ったのは衆知の事実である。

一方、インドネシアでは、日本占領下の一九四三年九月、スカルノ（初代大統領）ハッタ（同副大統領）らが民族統一党を結成。四五年五月インドネシア独立準備調査会が発足し、日本の降伏直後の八月十七日、共和国独立宣言を発表している。

ざっとこうみると、臨時革命政府（亡命政権もふくむ）を結成する条件は、大別して次のようになる。

- 一、自由が他民族、あるいは他民族のかいらい政権により支配されている。
- 一、多数の国民が、その支配を甘受せず、抵抗を示している。
- 一、独立勢力がある程度、組織力と軍勢力（抵抗力）を持つに至って



——それでは、亡命政権樹立の条件は何か。

答 第一に、米国とイスラエルがわれわれを承認し、われわれと直接交渉することだ。そして、全当事者による国際会議を開き、PLOを平等な代表として参加させることだ。

——ブレジネフ・ソ連書記長が最近提案した国際会議が開かれれば、参加するか。

答 あゝの提案をわれわれは評価している。米国やイスラエルが受け入れ、平等の代表として招かれるならわれわれは亡命政権をつくって参加するだろう。

——ではサダト提案の目的は何か。

答 まず、フセイン国王を和平交渉から排除すること。第二は、アラブでの信頼と威信を回復するねらいだ。だからサダトはカイロで亡命政

権を樹立しろと言っている。第三は、サダトはアラブのスーパ・パワーになるうとしていて、対アラブ関係の修復、国内問題の解決には、パレスチナ問題の解決が不可欠なことを彼は知っている。しかし、それは危険なねらいでもある。

アメリカがPLOを承認するとき

さらにつけ加えれば、PLOは承認しない国があるうと確固たる存在だ。誰もPLOをバイパスすることはできない。米国は、PLOを認めていないが、その存在は無視できない。中東和平はPLOの参加なしには交渉も解決もできないのだ。

だが、逆に、そうした技巧をろうさずに原則を貫いてきたからこそ、今日のPLOが存在するともいえる。と同時に、レバノン南部でみられるように、毎年多くのパレスチナ人が戦いの中で死んでいくのを、何とかならないかという気もするのだが……。

イミグダ。

理論的に言えば、臨時革命政府もしくは亡命政府というものは、外交的、政治的交渉がはじまる時点で設立されるべきものだ。交渉の土台をつくるものは武力闘争で、武力闘争から政治闘争への移行段階に亡命政権が必要になる。実際、アルジェリアの場合は、ドゴールがアルジェリアの自決権を認めた後に、臨時革命政府が樹立されている。

南ベトナムの場合も、北側がチュン政権を交渉相手として認めない旨を米国に通告し、米国がそれを受け入れてから、革命政府が樹立されている。それは和平交渉に参加する目的だった。

われわれの場合も、同様だ。イスラエルがパレスチナ人の自決権を認めることが亡命政権樹立の前提になるが、イスラエルは自決権はもちろんだ、PLOがパレスチナ人の代表であることさえ認めていない。その段階で政権をつくっても無意味だといえる。いまこの段階で亡命政権を樹立することは、相手側の要求を全面的に受入れることで敗北主義である。イスラエルがわれわれを承認するまでは武力闘争を続けなくてはならない。

サダトは逆に、武力闘争をやめ、政治交渉をすることを望んでいる。しかし、われわれは武力闘争以外に闘う手段のないことを知っている。

PLOが中東和平の核心であり、PLOなしでは中東和平が達成できぬことはハミード氏の言う通り、いまでは自明の理ともいえる。しかし、事実には若干の誤謬もあるようだ。例えば、ドゴールがアルジェリアの自決声明を出したのは、アルジェリア臨時革命政府樹立一年後の一九五九年九月である。まず受け皿をつくって、その後の実績で承認させるのも、一つの方法であろう。

現在、中東和平の最大の難関となっているのはPLO対イスラエルの関係ではなく、むしろ米国との関係であろう。PLOが臨時革命政府をつくり、それを米国が承認すれば、中東和平への突破口が開けるのは間違いないだろう。PLOは民族憲章でシオニズム機構の消滅をうたっており、パレスチナ民族評議会ファフ

反対している。最近、中東を訪問したキッシンジャー元米国務長官も、はじめは「ジョルダニア・オブション」を唱えていたが、サダトと会った後では、この提案を取り下げている。

サダトはキャンブ・デービッドの際は、自分がパレスチナ人を代表しようと考えていた。それが失敗したので、ヨルダンのフセイン国王を交渉に加えようとしたのだ。

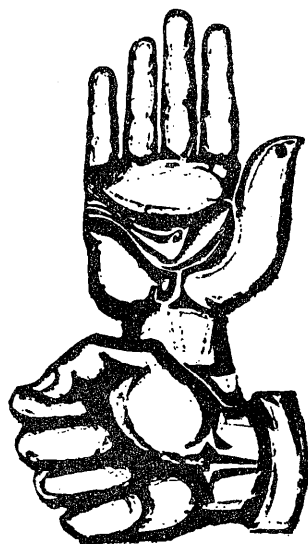
だが、和平交渉を進めるためにはパレスチナ人の代表を何とかみつけないわけにはいかない。しかし、PLOはいやだから、それに代るものとして亡命政権を打ち出したのだ。

もう一つの理由は米国との妥協だ。亡命政権なら米国も承認しやすいからだ。だがイスラエルは、タカ派のベギン首相だけでなく、ペレス労働党首も亡命政権を拒否すると思う。イスラエルは、いかなる形であれパレスチナの公式代表は認めたくないからだ。それはパレスチナ人の民族的権利、自決権を認めることになり、シオニズムと矛盾するからだ。

——PLO自身はどう考えるか。

答 原則的に言えば、PLOは亡命政権樹立に反対はしない。問題はタ

وقفوا الفاشية!
מצור את הכאשיון!



STOP FASCISM!

一方、PLOの場合はどうか。ヨルダン川西岸およびガザ地区は占領地である。両地区での選挙結果をみる限り、住民の大多数はPLOを支持している。

ト政権が多くの国民の信を失っているのも事実のようである。シアヌーク殿下は、旧国王として国民の信頼を得ているといわれるが、現状でどれだけの信用があるのかは不明。少なくともかつての南ベトナム政府ほどヘン・サムリン政権が住民の反撥をかつているという証拠はない。したがって、反ベトナム統一戦線は、民族解放という面より国際政治の産物という色彩が強いようにみえる。

PLOがサダト提案を拒否する理由

——亡命政権を樹立したらというサダト提案をどうみるか。

答 サダト大統領が「亡命政権樹立」を呼びかけたのは、キャンブ・デービッド前と今度二度目だ。この提案は、レーガン新政権の発足、エジプト・イスラエル和平交渉の行き詰まりと当然関連があると思う。

われわれの分析では、サダト提案はまず、キャンブ・デービッド合意が失敗したことを示している。第二はイスラエルの次期政権につくとみられる、ペレス労働党首が唱えている、ジョルダニア・オブション（ヨルダンのフセイン国王をパレスチナ人の代表として、交渉に加える）に反対するねらいがある。サダトはフセインが（アラブを代表するという）自分の役割を奪うことに

反対している。最近、中東を訪問したキッシンジャー元米国務長官も、はじめは「ジョルダニア・オブション」を唱えていたが、サダトと会った後では、この提案を取り下げている。

サダトはキャンブ・デービッドの際は、自分がパレスチナ人を代表しようと考えていた。それが失敗したので、ヨルダンのフセイン国王を交渉に加えようとしたのだ。

だが、和平交渉を進めるためにはパレスチナ人の代表を何とかみつけないわけにはいかない。しかし、PLOはいやだから、それに代るものとして亡命政権を打ち出したのだ。

もう一つの理由は米国との妥協だ。亡命政権なら米国も承認しやすいからだ。だがイスラエルは、タカ派のベギン首相だけでなく、ペレス労働党首も亡命政権を拒否すると思う。イスラエルは、いかなる形であれパレスチナの公式代表は認めたくないからだ。それはパレスチナ人の民族的権利、自決権を認めることになり、シオニズムと矛盾するからだ。

——PLO自身はどう考えるか。

答 原則的に言えば、PLOは亡命政権樹立に反対はしない。問題はタ

PLOと臨時政府

小林慶二氏の分析へのコメント——浦野 起央（日本大学教授）

エジプト・イスラエル和平交渉の中でサダト・エジプト大統領は再びパレスチナ臨時政府の樹立を呼びかけ、またPLOの国際承認、そしてその闘争の盛り上がりからして、PLOによる臨時政府の樹立が話題とされるに至っている。

臨時政府の三つの形態

第一。亡命政権——政府の主要成員が外国に亡命を余儀なくされ、外国に存在している政権。これは革命とか侵略によって支配政権の存続が不可能になり（国内に安全地帯が存在しない）外国への亡命を余儀なくされている場合である。ドイツ占領下のフランスのド・ゴール政権の事例が典型的である。但し、その政権の支配が回復できたのは、アルジェリアでの活動と黒人アフリカの支援やらであった。これと対照的にポーランドのイギリス亡命政権は、流産してしまった。カンボジアの事例で

果たしてパレスチナの、そしてPLOの臨時政府はできるだろうか。いつ、どこで、どういう形で。

まず、「臨時政府」といったものの整理から議論を進めたい。これには、三つの形態があると思われる。

は、外国に樹立されても、国内での解放闘争と大きな政治変動（つまり、ロンノル政権の倒壊）があつてこそ支配回復の成功をみたのである。

第二。臨時政府——内戦状態の中で解放区もしくは聖域（又はこれに準ずる外国）に過渡期の政権が樹立される場合。これに、解放闘争が遂行され、その帰趨が政権の正統性を決定づける。その結果、休戦交渉もしくは闘争の完遂をもって正統政府が樹立されるが、その政府の国家承認は概して形式的手続きにとどまることが多い。つ

まり、その交渉の達成もしくは闘争の勝利が政権の正式な樹立となるからである。その事例は、アルジェリア共和臨時政府あるいは南ベトナム共和臨時政府に典型的でその臨時政府の樹立に当たっては既に国家承認が付与された。

完了後は当然に新国家政府政権に移行する。それはポルトガル領アフリカの独立付与に当たつての宗主国と植民地の解放組織間の協定に規定された形態に典型的で、いわば移譲の合意についての事項手続きとしての面をもつ。但し、アングラでは、三派の解放組織の連合政権の形をとつたため、引き続いて三派間の内戦現象が生じた。これは例外的なものとされよう。以上三つの形態に照らしても、PLOの闘争は、革命の完遂をめざし武装闘争から政治闘争に入りつつあるとされ、また西岸地区とガザ地区の「自治」案が抬頭してきているだけに、臨時政府の樹立が期待されるところといえるかもしれない。

臨時政府樹立の意味

もつとも、こうした主張は、既にパレスチナの闘争がもつていた。一九四八年の七月全パレスチナ民族政府の樹立がそれであった。西岸とガザで暫定民政がとられつつあった。しかしヨルダンの西岸支配と引き続く状況の転化で、その機能は停止された。また、一九七二年九月サダト

・エジプト大統領は臨時政府の樹立を呼びかけた。この呼びかけにパレスチナの「公式の実体を形成する」というものであった。これは、パレスチナ人の存在を確認させ、将来の紛争解決にその役割を引き出すことにあつたが、PLOはそれを拒否した。

だとすれば、PLOにとって、臨時政府の必要はないのか、その樹立にどこまで意味があるというのか、ということになる。これは、三つの議論につきると思う。

第一。 PLOはいまや既に正統性を有している。イスラエルがPLOを承認し、交渉に入るまで、彼らは「戦う」ことだろう。そこには「取引」としての臨時政府の樹立の余地はない。彼らの組織と国際的承認はあるからだ。

第二。 政治交渉の当事者としての臨時政府はどうか。第一の前提に立つてイスラエルによる（交渉相手としての）承認をもつて、はじめてその政権樹立（ここでは暫定政府の樹立）が課題とされよう。

第三。 西岸地区をPLOはどう扱おうとしているのか。例えば、西岸とガザのパレスチナ亡命政権を樹立する必要があるのか。——まず、国際的に承認された占領地域の「返還」を実現しなければならぬ。その原則を崩してしまうことになるか。妥協は、たとえ政権樹立の「取引」をもってし

ても、いつさい許されないとということではないか。

そこでは、政権樹立が望ましいことであり、またPLOがそれを求めていたにしても、原則上の妥協に応じられないだろうし（それは解決交渉の継続上の「妥協」と違つてからである）、それは、大国の道具とされないし、アラブの道具とされないというこの態度であろう。

PLOは、既に確固たる存在にある。そこでは、解決の主体の確認（あるいは交渉相手を認知させること）の問題として、亡命政府がとりあげられることとなければ、また臨時政府が問われることもない。その要点は、新しく樹立されることとなる政治体 Politic（それは、これまで通り……政府と呼ばれるかもしれない）に、新しい実体の意味がどこまで付与されるかどうかということである。

あろう。この提起は三つの形態の政府とは違う新しい政府の形成ということであろう。

新しい政体

PLOが今日意図しているところは何か。結びの議論の一つの整理として以下三つの点を指摘したい。

第一。 イスラエルとの対決という原則、国民憲章の立場は崩さないことがPLOの出発点とされよう。

第二。 西岸の解決の手段として臨時政府と、ここでの政権樹立とは、次元の異なることであろう。

第三。 しかし、PLOは新しい政治体の形成によるパレスチナ問題の解決を意図している。だとすれば、それは、まったく新しい政府が予定されることになるか。

その政府とは——（モデルの論証

として）パレスチナ問題の解決において、対内的秩序と共存が保障されなくてはならない。そして、対外的安全保障において、不戦共同体の形成と実体化が願望されなくてはならない。

その新政府への承認とは、PLOの国際的承認を超えたもので、つまり、新しい公正・平和・安全・共同体への、国際的認知とされよう。

そこでは、解決の正統性に、新しい意味が、付与されるところであるが、諸民族の共存という、新しい次元の下での、機能的政府の形成と考えることができる。

以上の議論のまとめは、パレスチナの闘争がアイデンティティの形成において新しい次元を切り開いてきた一つの帰結であり、中東に新しい公正・平和秩序の創成を求める願望のビジョンでもある。

流動

5月号 430円

特集 激動の80年代と新左翼運動

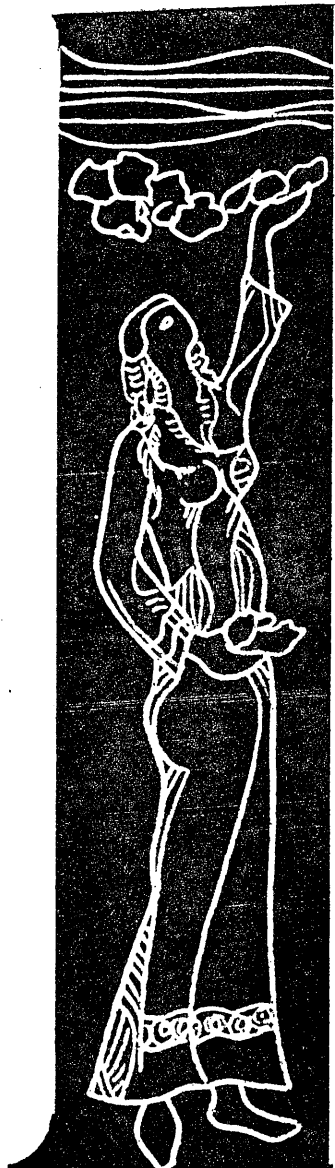
20党派へのアンケート

日韓・ポーランド・防衛・改憲論議・原発・エコロジー・婦人解放・内ゲバ・問題等を、各派はどのように分析し、いかに闘おうとしているのか？

共産同*共産同赤軍派（プロ革）
*共労党全国協議会*他
●未発表演説録百枚一挙掲載！
二段階統一方案
『同時代ゲーム』のイデオロギー 木村隆美

流動出版

〒105 港区愛宕1-2-2
電話03-433-7461(代)



「脱イスラエルの論理」として一括されてしまう時、そこでは解放のために関わっているパレスチナ人は全く著者の念頭にはなく、切り捨てられてしまっている。あるのはイスラエル国家のみである。

歴史認識のない線上意識
著者の認識によると、わが国は「一九七三年の石油戦術を伴った第四次中東戦争を契機に、大きく転換して親アラブに到達した」(26頁)という。この親アラブの方向転換が、著者の危機意識を喚起させたことは先に述べたが、確かにアラブ戦術によってわが国の中にアラブに傾く輩が存したことは事実であろう。われわれもこの様なパレスチナ問題への対応に対しては批判してきたところであるが、果してこの転換は、著者のいうようにアラブの石油戦術にあったのであろうか。この様な受

けとめ方自体が、実は著者の線上意識でのとらえ方の限界を示しているといえる。

少くともパレスチナ解放闘争を学んできた者にとって、転換という言葉で表現し得る事実があったとするならば、これはまさにパレスチナ人による解放闘争そのものに存するものであつて、石油戦術によるものではない。あくまで石油はひとつの方法(戦術)であつて、根源的な理由ではない。

石油戦術による転換という線上、次元でのとらえ方をしている限り、この時代の歴史認識は欠落している。むしろわが国を含め、世界各国が意識の転換をせまられているのは、アラブ・イスラム世界から問われている既成の歴史認識の在り方ではないのか。

それ故、もしも危機という言葉を使

用いるとするならば、著者がいうように石油戦術を伴って大きく親アラブに転換し、「脱イスラエルの潮流」に便乗するわが国の状況にあるのではなく、パレスチナ解放闘争を通してアラブ世界が問われている歴史認識の転換にうといわが国の状況こそが、まさに危機的ではないのか。

あえて著者のいう意味において日本人の意識線上でパレスチナ問題をとらえるとするならば、先づは「日本人のアラブ・パレスチナ認識」の追跡をなしてはじめて、真実が明確にされるかもしれぬ。著者の「ユダヤ・イスラエル認識」の線上では、パレスチナを語る論者はすべて「イデオロギスト」か「心情主義者」に分類されてしまう。そして、直接パレスチナ人の叫びに触れ、出会った人々の感激は「エモーション」にすぎないと片づけられてしまうのだ。

NHKが放映したアレクサンダー橋上のモハメド・アバスの絶叫は「老人の体験は事実であるが、客観的事実の検証がなくセンチメントが先行している」と断じられてしまう。

「客観的立場」を装いつつ
著者のいう客観的事実の検証というのは、「デイル・ヤシン虐殺」(187頁以下)の取り扱い方をみれば明白である。著者はこの項で五つの資料を紹介して「それぞれの叙述を批判的に読むことはできても、正直言っていざれが真実か判定し難い。また、いずれもが真実だとも思えて迷う」(188頁)とある。しかし、著者は「注」のコメントにおいては、少しも迷っていないのである。広河氏の引用文に対しては「アラブ諸国の教科書についての広河の言及はなにもない」と記し、中谷氏については「原著の趣旨を全面的に否定する」というユニークなものといえよう」と、著者流のシニシズムを漂わせている。客観的立場を装いつつ、一方の資料に関しては、コメント付きなのである。

この「デイル・ヤシン虐殺」の項を読みながら、今日の韓国で起る出来事に対して、日本でそれぞれ全く違う受けとめ方をしている状況

イスラエル批判が なぜ 反ユダヤになるのか

——宮沢正典氏への公開論争——

日本キリスト教団阿倍野教会牧師 村山盛忠

宮沢正典著「日本人のユダヤ・イスラエル認識」は、七年前、同氏によって執筆された「ユダヤ人論考——日本における論議の追跡——」の続編でありつつも、単なる続きものではなく、著者の危機意識に立って執筆されている。同氏の危機意識とは第四次中東戦争以来、国内に起きてきた親アラブへの方向転換にある。

著者が何をもちて方向転換とするかについては後述するとして、本書の表題からして、ある程度の推測はつく。「ユダヤ・イスラエル認識」とするところに、著者がすでに単なる「ユダヤ人論考」の追跡にとどまることなく、今日のイスラエル国家に対する関わりを重大な関心を持っていることが窺える。これが著者のいう親アラブへの方向転換に対する危機意識と重層してくるのである。

「ユダヤ・イスラエル」と、両語をピリオッドで並列して記す底には「現代のイスラエル批判者の中には反ユダヤの自覚がない」(論考172頁)という言葉に、いみじくも現われている如く、今日のイスラエル国家に批判的に関わる者は反ユダヤ主義者の線上で処理されていくのである。著者は本書のあとがきで「本文はひとつのコメントであるにすぎない」と記しているが、どうしてどうして今日のイスラエル国家に批判的に関わる者への挑戦状でさえある。

確かに、日本におけるユダヤ人論

議の追跡を莫大な資料の中から丹念に当りながら、時代的考証を試みつつ論述していく項は誠に興味深い。著者は、その認識や対応形態が類型化しうることを指摘しつつ、「ユダヤ人問題論議は、明治以来さかんに繰り返されてきたし、現在もなおその延長線上にある。むしろ変容、増幅されて再生産され続けている」(2頁)という。

脱イスラエルという切り捨て
著者は意識的にか或いは無意識的にか、今日のイスラエル国家に対する関わり方すらも、ユダヤ人問題論議の線上でとらえようとする。それ故パレスチナ問題の本質は正面から取り上げられることなく、パレスチナを語るものはすべからず「脱イスラエルの論理」という線上で一括し、処理されてしまう。まさに「宮沢正典のユダヤ・イスラエル認識」が露呈されているのだ。

パレスチナ問題の根底にユダヤ人問題が深く関わっていることは否定し得ない事実である。ユダヤ人問題

を抜きにしたパレスチナ問題は軽薄な政治主義に流されるであろうし、また著者も指摘する如く、時代のご都合主義政策のお先棒をかつぐ輩に随っていくことだろう。まさに今日の「アラブ問題」をアラブと同質にとらえる群である。

わたしの関わっているグループの中には、はじめからユダヤ人問題の生ずる差別構造を己が問題として受けとめつつ、一貫してパレスチナ問題と取り組んでいるメンバーもいるほどである。ユダヤ人問題が発生してきた歴史的構造を無視して、パレスチナ問題は決してとらえきれないだろう。

しかしパレスチナ問題の核心は解放闘争なのである。「明治以来さかんに繰り返されてきた」ユダヤ人問題論議の線上では、決してとらえることは出来ないのだ。勿論、著者流のやり方で取り上げること自体は全く自由であるが、パレスチナ問題の核心に触れず、まさに「ユダヤ・イスラエル認識」線上でとらえて

石田氏が無視したもの

何年前だろうか。私は占領下パレスチナにビル・ゼイト大学を訪ねたことがある。その時私を迎えた人々の口から、以前ここを訪れた一人の日本人の話が出た。自分たちの問題に理解を示した人間だった、と彼らは言っていた。私はその人間が板垣雄三氏だと考えて、それは信頼できる人間だと答えておいた。

帰国してしばらくして私は本屋で「ユダヤ民族の悲劇と栄光」(石田友雄著、現在「ユダヤ人と中東問題」と改題、六興出版)を見つけ、私の前にあのパレスチナ人の大学を訪れたのが石田氏であったことを知った。彼は、パレスチナ人の前では「彼らの問題を真剣に理解しようとしている日本人」としてあらわれていた。私はビル・ゼイト大学の人々に、石田氏が日本で何を発言しているか、どのような役割を果たしているかを伝えなければならぬと考えている。

前述書の改訂第三版の序に、彼は「イスラエル国独立宣言」の「われわれは、すべての隣国とその国民に対し、平和と善隣の提議において、われわれの手を差し延べ、自分自身の国土に定着した主権を有するユダヤ民族と、協力と相互扶助のきずなを樹立するよう彼らに訴える。イスラエル国には、全中東の前進のための共通の努力に参与する用意がある」という文章を引用したあと「今日まで、遂にこのアビールを受け入れる隣国は現われなかった」と述べているのである。これはイスラエル側の言い分以外の何ものでもない。「独立宣言」のあと今日までの間にイスラエルは何をしてきたか、それを彼は見ようとしている。

独立前にシオニストが成したこと、パレスチナの植民地化であり、農民の追放であり、パレスチナ労働者のスト破りと、それに乗じての職場奪取であり、パレスチナ人経済構造の破壊であった。強制的な「独立」戦争の過程で多くのパレスチナ

難民を生み出し、難民が元の地に戻れないよう法律を整備し、戦争後もパレスチナ住民を追放し、土地の奪取を続け、カセム村の大量殺戮を経てスエズ戦争に英米帝国主義の先兵として真先に加わり、シオニストの拡張主義を顕にし、それは一九六七年度の六月戦争による占領地域の植民地化の動きに受けつがれた。入植地建設(石田氏は入植地を「防衛村」と呼ぶ)、占領地経済の破壊、民族運動指導者の投獄、追放、占領反対に立ち上った人々の射殺、拷問などがその後続く。これに対して石田氏はイスラエルの「協力と相互扶助のきずな」の樹立の呼びかけを「受け入れる隣国が現れなかった」としているのである。

抑圧者にひざまずくべきか

彼は「中東戦争を、内側」から「歴史的」に理解するならば、問題の核心は「ユダヤ人問題」に他ならない、という結論に到達した」という。そして彼は日本のジャーナリズムがこの点を見ようとしなないと非難している。しかし石田氏の立場は「中東紛争を、内側」から「歴史的」に理解」しているのではなく、実はシオニスト・サイドから理解しているにすぎないという事は明確である。だから当然「問題の核心は「ユダヤ人問題」」になるのである。

石田氏の平和への提言は「アラブ世界がシオニズム承認という画期的な政策転換」をすることであると云う。何という独りよがりな甘ったれた発言だろうか。これはたとえばアパルトヘイトという人種主義政策をとっている南アフリカの存在の仕方を見れば、決して解決にならない」と石田氏は言っているが、そ

「フランスのとれた歴史感覚」の中味

— 石田友雄氏に問う —

広河隆一
(パレスチナ問題研究者)

たえばあの「光州蜂起」の事件にしても、官制から流される資料を採るのか、民衆の叫びとそのレポーターを素材として判断するのかわ、大きな違いが出てくる。それらの資料をいくらか多く並べてみて、少しも客観的事実の検証にはならない。むしろ、どれを、そして何を真実なものとして取り上げるかは、もはやその人間がどこに立っているのかを言っているかという、生き方の問題に関わってくるのである。

その限りにおいて、著者自身もすでにどこに立っているかを言っているのか、その立場性が明確であるにも拘らず、恰も公平を期するかの如くに、資料を並べて、判断に苦しむというポーズをとることは、事件そのものを隠ぺいする効果をもたらすことになるのである。

著者にはもはや、「ユダヤ人論考」線上に立つてコメントをなしているというポーズを脱して、己れのイスラエル国家観を正面切って語ってもらう時が、きているといえよう。

こうしたパレスチナ観のトーンは、早く石垣綾子(「パレスチナで見たこと」『朝日新聞』一九七四年八月二十一日夕刊ほか)をはじめ、次第にジャーナリズムに受容された。一九六〇年代、第三次中東戦争のころまで支配的であったイスラエルの「底抜けに明るい兵士たち」「はちきれそうな娘たち」の明るさ、「こんなにいい人たちがなぜ……」と、伝統的なユダヤ人像の修正を迫ったジャーナリズムにとって代って、「パレスチナ・ゲリラ、テロリスト」像の修正をこそ迫るのである。

PLOの招請を受けてレバノン、シリアを訪問したアジア・アフリカ、ラテンアメリカ美術家会議の一人は、アラファトPLO議長「固い握手と抱擁」を受ける。そして「アラファト氏の柔和な笑顔とうらはな肩、腕の固い筋肉に、祖

国解放への強い意志を感じ」とついている。同じトーンで、パレスチナ人民像が修正されるべきことを強調し、PLO東京事務所を正式な外交機関としていないことを残念がる。こうして、詩人や画家たちの無批判な心情的傾斜は、パレスチナ賛美にいたる。政府がこれと同調しないかぎり、日本の中東外交の、アラブへの寄り具合は、「まだ足らん」、「ほんものではない」と突きあげを受ける。

さらには、「イスラム・パワー」は、「強者のマイト・イズ・ライト(力は正義)への、ライト・イズ・マイト(正義は力)の主張」であり、「暴走する物質文明への、倫理世界からの対応のそれであった」という教育研究家の「ムスリムへ

の正しい認識」への喚起がなされる。また、「正義は常にパレスチナ人の側にあり」とする確信と、アッラーの「裏書き」をもつて立つ、「遠く離れたパレスチナの、フエダイン達」に思いをはせて、彼らを「戦士ではなく殉教者と呼ぶべきである」と提言しつつ、「イスラムの報復」が「蔑視や差別の蓄積が背後に」あったからだ、アラブ問題評論家は教える。これらのイスラムやパレスチナに明るい人びとは、日本人が認識を改めないかぎり「石油がなくなる」理由を示唆する。

資料

—— 同氏著「日本人のユダヤ・イスラエル認識」(昭和堂刊) 一五六頁より抜粋。

PANA

台頭する
ニューパワーの動きを
とらえる二大情報誌
同時創刊!

イスラム世界の動向を速報。B5版週2回(月・木)発行

イスラム世界の動向

イスラム世界全体としての動向を日本との関係において解説。A4版月1回(毎月15日)発行
創刊号はイスラム・サミット特集。イスラム世界意志決定機構紹介。保存資料として最適。

2誌セットで会員に配布
会費年120,000円(郵送料込み)
「イスラム世界の動向」1部1,500円
「イスラム世界と日本」1部500円

海外版パナ通信 英文

PANA Weekly Report

アラブ・イスラム世界に関する日本のオピニオン誌
A4判週1回(毎週土曜日)発行 ISSN0389-3871
1979年10月創刊。1部400円 年間購読料15,000円

パンアラブ通信社

東京都新宿区歌舞伎町1-5-4 第6荒井ビル
TEL 03(205)1311

もその問題は、シオニストがパレスチナ人を追い出すといった方針を実行に移したところから始まったのである。シオニストとパレスチナ人が対等の立場で紛争をかかえているのでは断じてないのだ。解決は、パレスチナに入植したユダヤ系の人々が、シオニズムを捨てることからしか始まらない。そしてシオニズムの強行化の過程で犠牲になった人々

「ユダヤ人」とパレスチナの関係

石田氏の思想的基盤は「ユダヤ人が独特の民族史を持つている」という点にある。つまり彼は世界の「ユダヤ人」の共通したアイデンティティに自らの研究の対象を置くため、少々のシオニズム拡張政策批判もできるし、それが彼の中東問題で一定の中立的ポーズも装えることに結びついている。

ところで「ユダヤ人」の「脈々た



ユダヤ人と中東問題
石田友雄

版局)。石田氏は「ユダヤ問題」に深くとらわれている割には、この問題を浅薄にとらえようとする。そして「ユダヤ」の民族性、流離の生活の

シオニストの言葉を持つ聖書学者

石田氏は、イスラエルの用語を用い、イスラエルの発表をそのまま真実であるとして報告する。「イスラエルでは、アラブ人の破壊活動者を「ゲリラ」と呼ばず、「テロリスト」と蔑称する」と書きながら、彼も「アラブ・テロリスト」と「蔑称」している。もっともこの用語は、同じ本の後の部分で中立的立場を主張しなければならぬ部分では「ゲリラ」となっている。本当に反動的な日和見主義とはこういうことを言うのだろうか。別のページで彼は「シオニズムを否定し、パレスチナ人と連帯してイスラエルを解体することを目指す極左団体に加入し、イスラエルの軍事機密をシリアに渡した」と書いている。これは私の友人だったウディ・ヤディブのことを言っているのだが、機密うんぬんはイスラエル法廷のでっちあげだった。もちろん証拠はない。

彼は自分の専門の「古代イスラエ

に、どのような責任がとれるか検討を始めることだろう。「PLOのゲリラ攻撃は、ベギンの占領継続政策の支持者を増やしているだけ」という指摘もずいぶん御親切さと言いたい。ここでは石田氏はあたかもパレスチナ人側の政治顧問になったような口をきいている。しかし彼の目的は、ゲリラに対する批判をおおることにあることは見えやすい。

る歴史」についての彼の記述には、大いに異論がある。

彼はカナン人がこの地の先住民であることを知っている。ヨシユアがヨルダン川を越えて、カナンに侵略したあとも、大多数の都市や村は、カナンの様々な部族の住民をかえ続けた。ダビデがエルサレムを攻略したあとも、この都市の住民の大多数はカナン系のエブス人であり続けた。しかし、多くの聖書学者やシオニストが陥る一つの落とし穴が、ここにある。つまり、ダビデが王国を築いてから、あたかもカナンの住民の大多数が古代ユダヤ人になったかのような錯覚を抱いているのである。先住民はどこに行ったのか。彼らは

中での一団性を説明するためには、民族も国家も宗教も、一切をごちゃまぜにしている。

ルの王朝」とやらの研究だけをコッコツとやっておればよかったのだ。それがいつのまにか中東問題で「本質とその現実的解決案を提言する(同書オビより)」などという立場にまつり上げられたために、世の中に害毒を流し始めたのだ。「人類の歴史の中で、新来民族が先住民を押しつけて定着したという例はいくらでもある。」としてアイヌやインディアンの「泣き寝入り」を書き、



ユダヤ人とイスラエル人
石田友雄

ユダヤ人とイスラエル人

石田友雄

す。以来、現在までの歴史の中で続いてきたのです。ここで私は歴史の議論などやるつもりはなく、むしろイスラエルでの経験から今の問題について歴史的、且つ現代的に考えていきたいと思えます。イスラエルの歴史はアブラハム・イサハムが実在の人物か否かは学問的にも議論がされていますが、一という歴史から始まることになっている。前二千年

「月刊イスラエル」一九七八年六月号 六頁より(部分)

皆殺しにされたのか、カナンから追放されたのか。そのような記述は、石田氏がよって立つ聖書のどこにもない。カナンの地(後にパレスチナと呼ばれる)が多くの侵略をくり返して受けてきたことは、良く知られている。そのため現在では、その多くの侵略軍の一つが、ヨシユアの軍勢であり、部族を率いて、この地をダビデの時代に制圧したと見る考え方が主流になってきている。しかし、古代ユダヤ人の栄華は、他の侵略者の場合と同じように、長くは続かなかった。そして侵略者がローマに変わったあとも、この地に生きる住民はそこに生き続けた。この人々は、もちろんカナンの頃から多くの混血をくり返している。古代ユダヤ人とほぼ同時期にカナンに入ったペリシテ人も、一五〇年ほどのうちに、同化してしまった。しかしもう一つの考古学的考察は、彼らの同化していったカナンの人々がその数千年も前から、何度かの大移民の波を繰り返しながら、アラビア半島の奥地から移り住んだ人々だという見解を有力なものとして見なしている。(詳細はPLO駐日代表事務所発行の「フィラステイン・ビラーディ」誌六月号を参照されたい。TEL 463・28

「ユダヤ人にとって不幸なことに、パレスチナ人の背後には、一億の大アラブ民族がひかえていた(傍点筆者)」と言っている。この言葉をとり上げて、石田氏の侵略性を見るなら、山本氏に「ヒステリック」と攻撃されるだろうか。

この本のエピソードは、次の言葉で結んでいる。「もしも、イスラエルが中東の一員として受け入れられるならば、イスラエル人と彼らの親類である世界のユダヤ人は、その勝れた頭脳と莫大な資金をもって、この地域の急速な発展のため大いに貢献するであろう。そのような日が来た時に、ユダヤ民族の悲劇の歴史は、栄光の歴史になるのである。」一言一句が、なんとあのパレスチ

40) 石田氏と山本七平氏は、よく「月刊イスラエル」誌に登場する。そして彼らは口をそろえて、「エルサレムがダビデの王国の首都となって以来、この街が聖都となった」と言っている。これもおよそ歴史を理解しない暴論だ。エルサレムはエブス人が建設したとされているが、この名は彼らの神サレムの街という言葉に発するという説が有力である。ダビデの神殿はこのサレムの神殿を模倣したものに過ぎない。エルサレムはダビデが攻略するずっと以前から聖なる都であった。石田氏や山本氏は、何でもかんでも「ユダヤ人」とパレスチナを結びつけようとして、シオニストのパレスチナに対する権利を承認しようとしているのである。

石田氏は「ユダヤ人がユダヤ人であり続けた」ことを、強固な民族性に求める。私はここでこれに対してこと細かく反論するつもりはない。ただアウシュビッツで殺されたアブラム・レオンが、資本の発展とユダヤ迫害、その結束の関係を見事に説き起こしているの、是非とも一読をおすすめしたい。「ユダヤ人問題の史的展開」柘植書房、法政大学出

ナの悲劇の生みの親ヘルツェルの言葉に似ていることだろう。シオニストの彼は、トルコに対して自分たちを受け入れるなら、自分たちはトルコに繁栄をもたらす、と言ったのだが、日本のシオニストは、自分の聖書を武器に、キリスト教界に対して「バランスのとれた歴史感覚」を売りものに、帝国主義の哲学を説いているのだ。彼の言葉は、搾取を目的とする植民地主義者が、歴史上いかなるところでも用いてきた言葉だ。この小文は石田氏の手元に渡ることとを望むが、彼の反論が本誌に寄せられることを期待したい。

× × ×

以上の原稿は一九八〇年七月号の月刊「指」に掲載されたが、その後石田氏より「指」の編集に關係している人あてに、この広河論文は、①一切が誤解と誤謬である、②学問的にも無視されるべきである、③石田氏が「月刊イスラエル」に登場したことは全くないという抗議が寄せられた。そして編集部から「月刊イスラエル」に掲載してもいいものを載つたと書いたのなら、問題であるとの話があったため、ここに石田氏の登場する「月刊イスラエル」の写真を掲載する。

帰るゆかん祖国への道

——ガジさん夫妻のたどった道——

「これほどまでに愛した祖国の地パレスチナから私たちは追い出されたのです」

「私たちは一九四八年の五月七日の金曜日に結婚しました。五月十四日の金曜日には、私たち夫婦は村を強制的に立ち退かされました、祖国での結婚生活はたった一週間しかなかったのです。」——こう語るアブ・ガジ氏は、六十歳とはどういえないほど若々しく、機敏で、たくましい。パレスチナの故郷のことや、きつとそこに帰るのだという強い信念を語るときには、特にそう見える。

記者は、レバノンのスールのま南にあるラシディーエのキャンプにある彼の家の狭くてみすばらしい部屋で彼と会った。ここに着いたとき、アブ・ガジ氏は、二日前にイスラエルの砲撃で破壊された自分の家の屋根を修理し終えたばかりであった。

一九四八年の五月十四日金曜日にいったい何が起ったのか、そしてどうやって妻のウムさんとラシディーエ難民キャンプまで辿り着いたのかを語ってくれるようアブ・ガジさんに頼んだ。彼は私の質問をささげ、「とにかくまず、お茶を飲みましょう」と言った。妻のウムさんがお茶を入れている間に、私の子どもたちのことをたずね、私も彼の子どもたちについて聞いたりした。

▼…5月14日に起ったこと…▲

お茶を口に含みながら、アブさんは、いまレバノンにいる五十万人のパレスチナ「難民」のひとりにさせられてしまった、数々の出来事をじっと思い返している。

の家へ戻れるものと思っていました。ですから、いつでも戻れるようにと、国境の近くにとどまっていたのです。

ところが、アル・ナクウラに来て一週間が過ぎようとした頃、生きのびていくためには何らかの仕事を見つけて出さなくてはならないということに気がつきました。状況は大変厳しくなっていました。飢えや病気が急速に広まっていた。

私は、仕事をさがしに、北東の方へと向かいました。アル・クレイラという国境に近いレバノンの村のある農場で働く仕事を見つけた。労賃は一日あたり一ポンド半という最低のものでした。故郷の村を出てから三番めにおちついたアル・クレイラ村で二年間を過ごし、そこで、妻は妊娠し、息子が生まれました。けれど、そこでも暮らしは厳しく、私たちの暮らしていた土地の使用を地主が要求してきたので、そこを立ち退かなくてはならなくなりました。

四番目に移った所はアル・ヘンニヤという村でしたが、そこで私たちはアル・アズィーヤの古い石造りのアクエダクト（古代の水道）を発見しました。そのアクエダクトの柱に囲いをつけて家を作り、さらにアクエダクトの水も利用して飲みました。そこには一年住み、娘のイクトバルが生まれました。

スールに行つて仕事口を見つけることにしました。家族を連れてスールに行き、そこに三カ月いましたが、仕事は見

た。辛く苦しい思い出の数々をたどるその表情は苦痛にみちていた。

私は彼をせきたてて聞いた。「アブ・ガジさん、その時の様子はどんなものだったのでしょうか」

「と言うと三十三年前の、苦難と放浪の旅のことですか」と彼はたずねた。「そうです」と私がうなずくと、アブさんは語り始めた。

「私はアル・バッサというパレスチナ北部の村のものです。およそ百ドゥーナム（約十ヘクタール）の広さの自分の土地で働いていました。それは父から受け継いだものです。父は、祖父から受け継いだものでした。豊かな、いい土地でした。私たちは、何不自由なく暮らししていました。」

忘れようとしても忘れられるものではあります。一九四八年の五月十三日の晩に、アル・バッサ村のほかの若ものたちといっしょに、国内の情勢について話し合っていたんです。戦争はもう始まっていて、ディール・ヤシーンという村で起きた大虐殺など、シオニストたちの恐ろしく残虐な行為をいくつか耳にしています。村が全滅させられ、住民は老人も女も子どもも皆殺しにされ、その遺体がばらばらにされたり、村の井戸に投げ捨てられたりしたというのを聞いて知っていました。

『村を離れるべきだ』と言う友だちも何人かいました。侵入者たちがアル・バッサを攻撃する計画もたてているだろう



つかりませんでした。それで、アル・アズィーヤの「家」へ戻り、一九五二年までそこにどまりました。

その年、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）は、パレスチナ人のためにラシディーエとアル・バッサにキャンプを建設しました。そこでまずスールのすぐそばのアル・バッサの方へ移動したのです。そして一九六五年に、このラシディーエへとやって来て、その時からずっとここに住んでいるのです」

▼…知識は光、無知は闇…▲

「こういう厳しい移住の生活の間ずっと、あなたはどやうやって九人もの子供を之しい収入で養つてくれたのですか」と私は聞いた。

ウムさんは、こう説明してくれた。「UNRWAが学校を建ててくれると、子供たちをそこへやりました。そういう学校に子供たちは十年生まで通い、中学校を終えました。毎日、儉約できるだけ



からと言うのです。皆さんは恐がついてたのですが、おっぱりにそれを口にすることができなかったのだと思います。私は逃げたりしないと行ってやりました。自分の村以外のところで暮らしたいなどと絶対に思わなかったのです。しばらくすわって話したり、お茶を飲んだりして、それから帰宅して寝ました。

それから二・三時間も経っていませんでした。五月十四日の朝早く、シオニストによるアル・バッサ攻撃が始まったのです。攻撃はすさまじいもので、無差別砲撃でした。攻撃の始まったその時から、村の徹底的な破壊と住民の根絶がねらいであったことは明らかでした。

もちろん、私たちは使えるものは全て使つて村を守ろうと必死に抵抗しました。私たちには、ほとんど何もありませんでした。彼らにはたくさん武器があり、それに援軍もありました。夕方までに、村にあった物は何もかも壊され、焼かれてしまいました。私たちに残され

儉約し、肉とかそういうものを食べないで節約してきました。こうやって、学校用品を買ったり、六人の子供たちを高等学校へやらせたりすることができたのです。ほかの三人もその年になつたら行くでしょう」

「それにしても、なぜ子供の教育がそれほどまでに大切なのでしょう。子供さんたちには働いてもらった方が、経済的に家計の助けになるとは思わないのですか」私はこう質問した。しかし、ガジ夫妻はすばやく答えた。「知識は光で、無知は闇です。知識は、わたしたちの祖国の地を解放するだけでなく、パレスチナが解放されてから、わたしたちの社会を建設するためのたにかいに、欠かせないものなんです」

「ラシディーエには、学校はどれだけありますか」

「ここには、小学校が二校と中学校が二校あるだけです」とアブ・ガジ氏は説明してくれた。「これらの学校も、一万七千人の人口にとつては不十分だから、学校は午前と午後の二交代制にしているのです。ラシディーエには高等学校はありません。UNRWAは数人の最優秀な生徒にしか高等教育の機会を与えてくれませんでした。」

けれども、パレスチナ革命はこれを変えました。それは現代の革命です。つまり、すべてのパレスチナ人を教育しなくてはならないというものです。今では、レバノンであろうとほかの国に居住して

た道は死ぬか、それとも村を去るかのどちらかでした。村を出ること——それがシオニストの望んでいたことなのです。妻と私はレバノンへと向かって歩きまわした。国境が近かったからです。家からは何も持ち出してきませんでした。毛布すら持つてこなかったのです。シオニストが爆撃を続けていたために、無事に村を離れることすら、むずかしい状況でした。

▼…国境沿いの村を転々と…▲

私たちは一晩中ひたすら歩きつづけた。そして、国境にある最初のレバノンのラボナ村に着きました。そこに私たちは一週間とどまりましたが、住む家なんかありませんでした。とにかく野原でつみ取れる草を食べて生きのびなくてはなりません。

そこに、われわれの一行がいました。パレスチナからの難民というわけですが、一週間して、レバノン警察がやって来ると、私たちにそこから立ち退くよう命令しました。それで、私たちは全員、やはり国境近くのアル・ナクウラへと移動しました。そこで一週間を過ごしました。ためらいながらも、私はアブ・ガジ氏の話にささげられて、たずねた。「なぜ国境沿いの村ばかりにいたのですか」

「ああ、それはですね、アラブの国々やそのほかの世界の国々から、この避難がほんの一時のものだという約束を何度も聞かされていたからです。すぐに自分

いようと、PLOの解放の事業がほとんどすべてのパレスチナ学生に、高等教育を受けるための奨学金を支給してくれています」

「奥さん、あなたがラシディエにこられたころの生活はどういうものだったのでしょうか。とくに衛生環境についてお伺いしたいのですが……」

▼…キャンプの人民委員会…▲

「母親の一人として、これはわたしたちの大きな関心のひとつですが、衛生環境はそれはひどいものでした。下水や汚物も外に放置したままで、いろんな病気を起こすものになっていました。診療所はUNRWAの管理によるものが一カ所あっただけで、それに、午前中だけ勤務する医者がひとりいるだけでした。その医者に診てもらう約束をとりつけるのも、必要な薬を手に入れるのも、とても大変なことでした。もし病人が危篤状態で、入院の必要があった場合、まず何枚もの申し込み用紙に書き込まなければなりませんでしたし、長く込み入った手続きが済んで、やっと、病人をスールやベイルートの病院に送れるようになるという状態だったのです。」

でも、PLOの解放の事業によって、医療は改善されました。今では診療所は五カ所にふえ、それぞれの診療所に、医師と看護婦が一日中勤務しています。急患のために、二台の救急車も配置されています。だから、危篤の病人をすぐにス

ールやサイダ、ベイルートなどの病院へ運び込むことができます。そこにある病院はPLOによって運営されていて、治療も無料です。これによって、私たちの保健衛生の問題や日常生活の問題は、見ちがえるほど改善されました」

ここで、私は再びアブ・ガジさんにたずねた。「キャンプの人民委員会はどのような役割を果たしているのですか」

「私は役員をしていますが、委員会は人々の要求に基づいて設けられたものです。パレスチナ人の諸組織から各一名がメンバーとして選出され、学生、労働者、婦人、教師などのパレスチナ人の諸同盟からそれぞれ二名と、いわゆる無党派の人々の中から二名の代表が出て構成されています。委員会は、キャンプで私たちが必要とすることをほとんどすべて扱います。たとえば、失業者がいれば、委員会は仕事さがしに手を貸したり、その家族に対して食糧や財政的援助を施します。イスラエルの砲撃で家屋が破壊されれば、委員会は援助金を出します。イスラエルの砲撃に対して人々をかくまう防空壕を作ったのも、キャンプ内の道路を建設したのも委員会です。それに、人々の間で生じるもめ事の仲裁もします」

▼…祖国で平和に暮らしたい…▲

「アブ・ガジさん、パレスチナの将来に対するあなたの夢は何ですか」

「祖国の私の家に帰り、平和に、そして自由に暮らしたいということです。時



間がかかるかもしれないし、あるいは、かからないかもしれない。とにかく、私たちは祖国に戻るんです」

「奥さん、ところで、イスラエルの砲撃は恐ろしいですね。どこの世界の母親でもそうであるように、私も子供のことが心配でなりません。イスラエルが砲撃をし始めると、私は子供たちを集めて防空壕へ逃げます。娘のニハドはイスラエルの爆撃で死にました。母親として、私は自分の子供も、どこの世界の子供も平和に暮らせるようにと願っています。イスラエルは私たちの子どもを殺し、私たちの家を破壊し、人権を踏みにじっています。それでも、いつの日か、真実が知られるようになり、私たちパレスチナ人たちの諸権利が認められて、私たちはパレスチナへと戻ることでしょう」

私は、小学校四年生で十歳になる息子のムワフアク君にも訊いてみた。「イスラエルの爆撃で死んだ友だちはいるの？」と。

幼い彼の顔に悲しみがにじみ、まじめな声でムワフアク君は答えた。「うん、アリ君とモハメッド君というふたりの友だちがね。ある日ふたりが遊んでいたら、『八日戦争』の時に、イスラエルのファントムジェット機が落ちていった爆弾が破裂したんだ」

「ムワフアク君、君は大きくなったら何になるの？」

「みんなを助けるために医者さんになりたい。でも、初めにパイロットになって、イスラエルの飛行機が爆弾を落としたり、ぼくの友だちを殺したりするのをやめさせたいんだ」

ここまで聞き出しても、記者はガジさん一家のたどった、長い流浪の旅の話を聞き終えたとは思えない。この一家は、シオニズムによって故郷を立ち退くことを強いられて、抑圧された、悲惨なキャンプ生活を強いられしてきた、すべてのパレスチナ人家族の一例にすぎない。いつの日にか、彼らは、これまできた道を祖国をめざして帰って行くことだろう。

今月の詩

祖国から引き裂かれて

アブ・サルマ

きかないで下さい

愛する祖国 愛しき人たちの別れを

どれほど嘆き悲しんだか

わたしには答えられそうもないのですから

彼方の空に走るパレスチナの光を見るたびに

わたしの胸は張り裂け 魂は奏えるのです

まるで平野を襲った津波のように

わたしたちは 祖国をあとにし

空を走る雲のように 散り散りになった

だが 愛する祖国パレスチナよ

われらはあなたを慕い 憧れるゆえに

苦しみに 拷問にもたえてきたのです

わたしたちがどこかの国の者になったと

おたずねになるのなら

答えはただ一つ

われらは おん身パレスチナのもの

おん身の大地から引き裂かれてい

かえって おん身への思いを強めるのです

わたしたちは 祖国の大地のいたるところに

憧れの種子をまいた

やがて大きな矢になることを願いつつ

そのあとで 祖国から引きさかれた

だが おん身は いつもわれらの心に住む

幾十年に及ぶ屈辱と離散の歳月をこえて

だが わたしたちは

あなたのふとところで再会する

白髪の老人となった者も 歳若き青年も

おん身の大地にひざまずいてキスをする

愛しい丘の辺の岩に 石に砂に

そして おん身の大地の芳わしい土にも

(関場理一 訳)

◆詩人について

アブ・サルマ(一九〇七年—一九八〇年)パレスチナの現代詩壇の最長老であったが、昨年十月に惜しくも他界した。「詩は祖国の大地から生まれるもの」との強い信念にたつて詩作をつづけ、多くの詩集をのこした。代表的詩集に「祖国を追われし者たち」(一九五三年)、「わが祖国の歌」(一九五九年)、「わがペンはパレスチナのもの」(一九七一年)などがある。

密告者

パレスチナの短篇小説

マフムード・ラバディ

真里 みどり訳

どこもかしこも緊張した顔や憂鬱そうな顔で埋まっていた。生活していくことはもはや耐え難いほどに辛いものとなったが、子どもらの目は挑戦へのきらめきで輝いていた。

村の若い衆の多くは、休戦ラインを越えて湾岸の産油国へと、生活の糧を求めて、移住してしまっていた。その一方で、ここに残った男たちはわずかの当てがいぶちを得るために、新しい雇い主たちに労働力を売ることを強いられていた。かつてないほど、生活が厳しくなると、それに応じてまともな仕事口が減っていった。そのため、昔はだれでも自由に参加できた市場の数も、あまりに少なくなり、大勢の小作人は耕作をあきらめ、そしてやめていった。

夜明けの祈りの呼びかけが始まるとともに、長い列をなしてバスを待つ労働者たちの姿が見られるようになる。この労働者たちは外国人のバスで入植地に連れてゆかれ、そこで、雇い主たちが軽蔑してやりたがらないような、困難で、身を落しめる類の仕事させられた。そして夕方になると疲れ切つて、頭をたれながら戻ってくるのだった。疲労と不



満のしるしが顔面にもはっきりと映し出されていた。

彼らは、まるでお互いに言葉を交わすこともせず、村の小道を通り過ぎていった。それはまるで拷問にかけられて意識を失ってしまったかのようにも見えた。あるいは、つまらない小言を口にしたりして、次の日の仕事を失うようなことになってしまっているのではないかと恐がっているようでもあった。

村の中に何人かの裏切り者の密告者がいるために、恐怖という重苦しい空気が村に流れていた。それで、誰かが政治談議をしようと

すると必ずいつも、声を低くしたり、こわごわあたりを見回すのだった。ラジオにしても、ニュース報道が流れてくれば必ず、つまみを回して音を小さくするのだった。学校や人生の落伍者である弱い性格の若者が、ほんの一握りの数の密告者となり、村の中にある苦情についての報告書を軍事総督に提出するのである。ときには、自分が個人的に嫌いだつたり、口げんかしたりした人間のことにについてまで報告書を書いて差し出した。

占領下にあつて、これらの若者は、村のスパイの首領である、アブル・ナジャリヤという、ベテランのスパイによって、墮落させられた。アブル・ナジャリヤは英国委任統治当局のためにスパイとして働き、次いでハシミテ王国に協力して、村人たちに不利を働いた男である。このスパイは雇い主が変わるのに慣れていた。常にそのときの支配者側の壁に寄っていたからである。また、三十年間以上も、人々から皮鞭にかかった駱駝のごとくに嫌われて、ひとりぼっちで孤立して生活することに慣れていた。

裏切られて当局に通報された人間を懲らし



めに軍のパトロール隊が村にやってくると、これらの密告者たちはきまつてどこかへ消え隠れてしまっていた。

重装備した占領軍の軍隊は、村の中でとびきり威厳のある人たちに対し、皆のいる前で屈辱を味わせたり、見せしめにしようという魂胆で、殴ったり蹴ったりした。アブ・シハダという、八〇歳を越えながらもなお現役として働き続け、村人たちの尊敬を集めている老村長がいる。彼はトルコの統治、英国、ハシミテ王国の統治を経験し、それらの統治下で生きてきていたが、今度の新植民者たちの横暴で残忍なやり口は、その村長もかつて見たためしなかった。この村長は、ある日ひとりの兵士に屈辱を受けてからというもの、老人の誇りを持ちつづけるためにも、がんと沈黙を守る決意をした。

受けた屈辱というのはこうである。ある兵士が村長の白髪のおごひげにつばを吐きかけ、村人をこれ以上かばおうものなら、村長を打ちのめすぞとばかりに、脅したのである。おまけに兵士は村長に向かってこう言った。「アブ・シハダ、きさまは破壊分子だ。きさまなんか村長でも何でもないんだ」

だが、学校の生徒たちはじっとしていなかった。生徒たちは年長者たちが弾圧に対して恐怖を抱き、従順であるのをいさぎよしとしなかった。熱い血潮がまだ血管に流れているその生徒たちは、恐れを知らなかった。彼らはエルサレムやナブルスのような大都市や、ジェニンという近くの町でのデモのことを耳

にした。そしてヘブロン、ガザ、その他のパレスチナの都市で実際に起こったストライキやバリケード、車のタイヤを燃やしたり、あるいは道路の封鎖や占領軍隊への投石のことを聞き知った。そこで生徒たちは自問した。「どうしてぼくらはおとなしくしていなきゃならないのか」と。

生徒たちは、レジスタンスの数々の英雄的な行爲を告げるラジオに、よく耳を傾けた。また年長者が、ナハリヤやテルアビブやエルサレムのゲリラ作戦のことを、かるうじて、聞こえる程度の低い声で、話しているのを聞いた。いろんな疑問が少年たちの胸に沸き起こってきた。彼らはこの状況がどんなものであるか、推し測つてみたこともなかったけれど、本当のことが分かりかけてきた。空想の中でゲリラ戦の英雄たちの姿を思い描いた。

少年たちはまだ、ゲリラをひとりも見たとがなかったのだ。ゲリラが、毎晩、白馬に乗って現れ、圧制者や占領軍の心に恐怖という種をそうつと播き回す。天から使わされた天使の如きものと想像した。ラジオのまわりに集まり、国境のむこうから流れてくる「パレスチナ革命の声」にじっと耳を傾けていると、皆の感情は熱病に犯されたような高みにまで上昇した。その「声」はこう宣言した。

「バドルからシャムスへ……。贈り物が君たちにもうすぐ届くであろう……。アラは君たちとともにある……。バドルからシャムスへ……。アラは君たちとともにある」と。少年たちはバドルとシャムスという言葉がわか

らず首をひねった。そこで、爽やかな風貌と知的な黒い瞳をもつスプヒ少年は問いかけた。「バドルとシャムスはどこにいるんだろ？ どうしてほくらからスパイを追っ払ってくれないんだろ？」

スプヒより年上のザイドは、スパイの首領アブル・ナジャリヤによる災いから村人を救うために、ナジャリヤの家を襲うよう自分を導いてくれるゲリラにひとりでもいいから会えないものかと強く待ち望んだ。少年たちは、レジスタンスやスパイ退治もしないで、

国中に墮落が広がるのを喜んでるかのよう

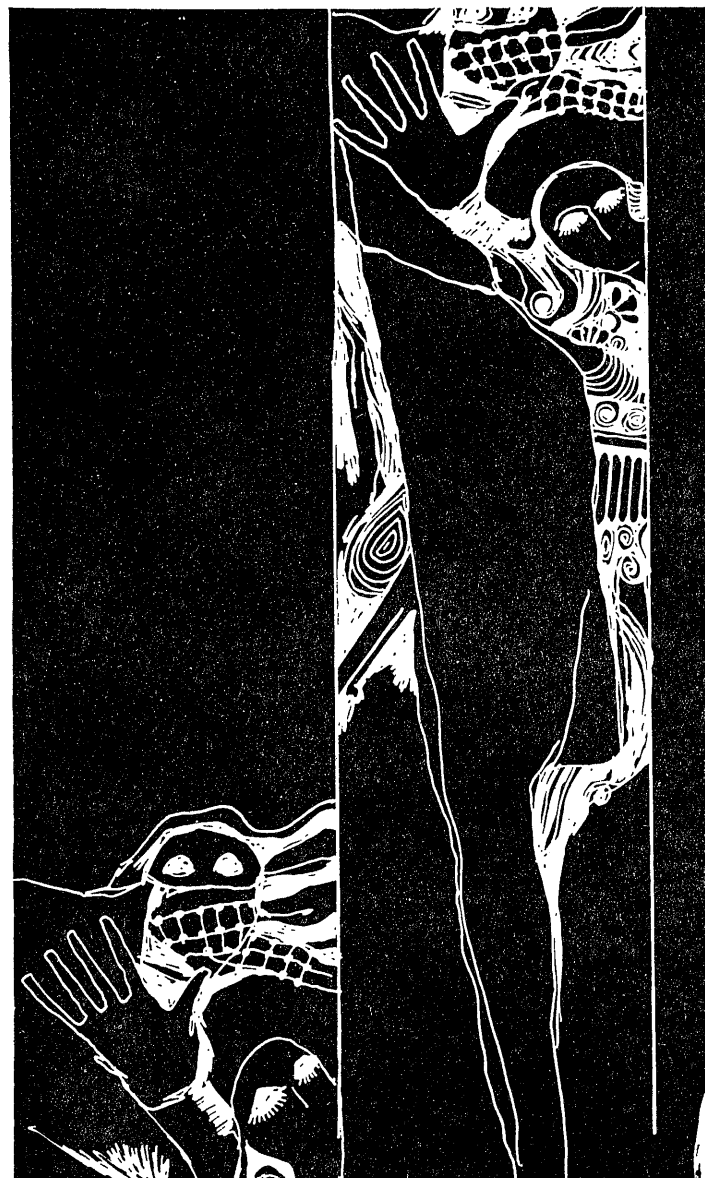
「だから、待ってる理由なんかないんだ」と、くり色の髪をしたザイドは言った。「ほくらは何かしなくてはならないんだ」「だけど、どうやって？」スプヒは首をかしげた。

「いつになったらスパイたちは正当な報いを受けるのだろうか？」と若いムハマードは、ため息をつきながら、不思議に思った。少年たちは待つばかりいるのではだめだと思っ

少年たちはラジオのまわりに群がり、かじりつくように聞き、それを書きつけた。その集中力は、少年たちが尊敬し、賞讃するハッサン先生の授業中に、彼らが見せるとき以上のものであった。ハッサン先生というのは、生徒のひとりが学校にパレスチナの旗を掲げた時、校長室の上にそれが翻るのをそのままにさせておくことによって勇敢さと大胆さを証明した人物である。少年たちの心臓は、嬉しさと誇りにみたされ、その旗といっしょに震えた。

そのことがあって以来、ハッサン先生は村中の尊敬を集め、少年たちの賞讃を勝ちえた。もし「サボタージュ行為」が続くなら学校を閉鎖してしまふ、と脅していた校長を、ハッサン先生は説得し、占領軍がやって来て強制的にその旗を降ろすときがくるまで、それを降ろさせないように承諾させたからであった。

ザイドとスプヒは、国境を越えて入ってくる「パレスチナの声」のラジオが教えてくれる、即席で作れる爆薬や火炎びんの製造方法を書きとどめた。



少年たちは解決法を見出した。彼らは手榴弾を用意したのち、首領スパイの家を攻撃することに決めた。その三人は火炎びんによるスパイの家の攻撃計画を立てた。それは精密な計画であったから、ほかの少年たちには一切感づかれなかった。三人は、首領スパイさえ殺せば小者のスパイの殆んどが恐れをなしてしまふだろうから、それで一掃できるものと考えていた。そうすれば、情けない屈辱生活から村人を救い出し、アブ・シハダ老村長のあだを討ち、傷ついた名誉を回復させることになるだろう。

声や、落葉が足もとで押しつぶされてかさかさという音のほかに、聞こえてくるものは何もなかった。三人は目的地に着いた。スパイの家は村のほかの家と変わらず、暗くひっそりしていた。ところが、三人の心臓が激しく脈打つ音が、いやに大きく聞こえてくるので、眠っているスパイの目を醒まさせはしないかと心配し、警戒しないではいられなかった。彼らは恐くなり始め、勇気が縮んでしまった。身がすくんで、後ずさりしかねないほどひるむ瞬間もあった。

村人たちの来襲を日ごろから警戒していたスパイはびくつきとして、ぱっと飛び起き、ライフル銃をつかみ、二発の弾丸を空中に向けて撃った。この三人の少年たちは、恐怖にとりつかれ、ふるえが止まらず、混乱してしまつた。恐ろしくて逃げようとしても、逆に、地面に足が釘で打ちつけられたように、動けなかった。弾丸がてっきり彼らの体をぶち抜いたものと思つたからである。その夜しばらくして、軍隊のジョーブがやって来て、三人の少年をジェニン中央刑務所へ連行していった。

イスラエルの軍事裁判所は、次のような刑の宣告を下した。「被告ザイド（十六歳）禁固四年、罰金五千ポンド。被告スプヒ（十五歳）、禁固二年、罰金二千ポンド。被告ムハマード（十五歳）、禁固一年半、罰金一千ポンド。

ある暗い夜、午前零時になると、ザイドとスプヒとムハマードはスパイのアブル・ナジャリヤの家に向かって人目を盗んで忍び寄った。いやな事故が起きないようにと、名人芸のようにこしらえた火炎びんを、それぞれが注意深くそっと持ち運んだ。それはごく普通の秋の夜だった。静寂を破るような車の音は全然聞こえず、ア・スファルトのような、暗やみを突き抜けるヘッドライトも、どこにも見られなかった。いくらか遠くで犬が吠える

だがしかし、三人は決意がひるまないようにといっしょに固まりながら目的をやり遂げる覚悟をした。火炎びんの灯心に十分の火をつけ、それぞれ力いっぱいに入り口をめざしてそれを投げつけた。戸びらが炎に包まれ、スパイとその子どもの頭上で家が爆発するだろう。そう思いながら、彼らは復讐の快感に酔いしれようと見守った。ところが、予想した速さで炎は上がらなかった。気の遠くなるように長い時間が過ぎた。家の戸びらにぶつかってわれるびんの音が聞こえると、怒れる

三人の罪状——「治安妨害、破壊工作及び、破壊工作を誘動する組織であるファタハのメンバーであること」

新日本文学

五月号
六四〇円

東京都中野区東中野1・41・5
03(362)8771

新日本文学会

●特集——民衆の表現と文化

『対談』徐兄弟の母 呉己順さんのこと……李恢成×藤田省三
桑野隆『民衆文化の記号学』を読む……栗原幸夫
小野二郎『紅茶を受皿で』を読む……鶴見俊輔
百姓口伝……加瀬勉
『労働者文学作品集』をめぐる……菅孝行・吉川良・山元清多
ルポ 学研闘争の発端と屈伸……佐川光徳

小説 祝賀会……村松孝明
帰ってきた子……坂本庄三
鬼役場 蛇裁判(連載①)……大貫和夫
暴徒異聞……石毛拓郎
夜の教室から……米山将治
文芸時評 地域性の文学……宇波彰
映画時評 『えんじやないか』……鈴木志郎康
音楽時評 水牛コンサート……高橋悠治
状況時評 原推進司長のリコール……西尾漢
同人雑誌評 歳月の重みと風化……岩崎清一郎
書評 菅孝行『戦後精神』……高橋敏夫

在日アフロ・アラブの女性を訪ねて

マルハバ!

マルハバはアラビア語で「こんにちは」の意味です

歴史が好きで、お国では考古学のお仕事をしておられたという。話は家庭内暴力にもおよんだ。校内暴力などは、全く考えられないとおっしゃる。「絹絵をやっていますと、日本文化の根源にふれられるような気がするだけでなく、心もなごみます」と明るく微笑する。



「主人は良き理解者で外に目をむけるようけしけるほどです」と語るナジェットさん。歴史が好きで考古学の仕事をしておられたという。

絹絵は本当に心をなごませますね

●チュニジア共和国大使夫人
ナジェット・ベン・ヤヒアさん

*インタビューアー 浅井久仁臣

「インタビューは大使館に隣接する大使公邸で行なわれた。広くゆつたりした客間に現われた夫人は、少し時間に遅れた私とカメラマンの長倉洋海（ひろみ）氏を嫌な顔一つせず、に微笑みをたたえ迎えた」

国では考古学の仕事をしました

—お国の休日というのに無理をいって申し訳ありません。

♥ いえ、そんなに多忙なわけでもありませんから。とにかくよくいらつしやいました。

—さっそくインタビューに移らせていただきますが、日常生活の話から伺わせていただきますようか。

♥ そうですね。二人の子供の世話と大使夫人としての公用で占められていますね。それと主人の世話もありますし。

—お忙しいのは余りお好きでない?

♥ いえ、そんなことはありません。国にいた時には、家事のかたわら働いていましたし、それも苦にはなりませんでした。

—働いていらつしやった?

♥ ええ、私は歴史が好きで、考



英仏語がお上手なベン・ヤヒア夫人。

外国旅行したことはありませんでした。

—そうしますと、かなり特殊な環境の中で育たれたということですか。

♥ はい。私の国では、まだ女性が大学教育を受けること自体が恵まれたことですし、それに周囲の人間にも恵まれたといえます。

—その中に御主人も含まれていると思いますか。

♥ 勿論ですとも（笑い）。

—御主人は外交官になられる前には教育者だったとか。

♥ 大学で英語を教えておりました。

—御主人以外であなたに大きな影響を与えた人といったら?

♥ 長兄です。彼と私は年令が離れていたせいもありますが、私のお手本として、また良き相談相手として力になってくれました。

—「私の十数年の取材を通して気付いたことであるが、アラブ社会における長兄の重要性は他文化に例をみない。日本にも依然、その形態が見受けられるものの、多くの場合形骸化してしまっている」

校内暴力は

ありません

—日本でいま家庭内、校内暴力という問題が憂慮されています。チュニジアもそういう問題を抱えているのでしょうか。

♥ 私はそれらの問題を新聞等で知って大変驚いています。家庭の中で親兄弟と喧嘩をすることはあっても、暴力に訴えるというのは極く少数の例外を除いてはありません。これらの記事は例外なのではないかというのが、私が記事を読んだ時の第一印象でした。

—残念ながらそうではありません。卒業式には警官を導入する学校もかなりあったようです。

♥ わが国では、親を敬い、兄や姉を信頼することに疑問を抱く者はいません。学校の教師も、私共には尊敬する対象であり、先生に暴力を振るうというのはどういふことなのでしょう。私には全く理解できません。幸いにも、わが国ではそのようなことは起きておりません。

—「徒党を組むことはなかったが、不良で、落ちこぼれに近かった私には子供たちの気持ちも分かるのであ

古学を勉強したものですから、それらの方面の仕事をしていたんです。

—貴国が、西欧、特にフランスの影響を受けており、他のアラブ国よりも女性進出の機会が多いと聞いていました（記者註・重婚、女性のベール、断食といった宗教に基づく習慣に反対するキャンペーンが展開されたこともあるお国柄である）が、そこまでとは……

—「そこで私の発言を、ごめんなさい、と切り」

♥ 私の国では、依然、女性の社会への進出は限られています。しかし、幸いにも主人は私の良き理解者で、私に外へ目を向けなさいとけしかけるぐらいです。ですから、役目

長兄が良き相談相手でした

—貴国がフランスの占領下にあったことから仏語が堪能なのは当然としても、英語がこれだけお上手なこと、それに物の考え方が西欧的なことを考えますと、西欧で育たれたか、留学なされていたのでは……

♥ いえ、とんでもありません。

パレスチナ問題を英語で読むための事典

① LEGITIMACY

『なんで英語やるの?』という中津嬢子さんの本が、以前ベストセラーになったことがあります。今日でも英語教育論争が盛んなのに、依然として決定的に欠けているのが、何のために英語を学ぶのかという問いではないでしょうか。

「何んのために? 就職のためでも大学受験のためでも、はたまた嫁入り用のアクセサリーのためでもない。自分たちの解放闘争の意義を世界の人びとに伝えるため——「自分たちが伝えなかったら、誰が伝えるのだ」「コマンドのひとりが言っていた。」小田実さんは『世界が語りかける』の中で、「トットツと、そして雄弁に語る」パレスチナのフェダイーンの英語を、それは、「就職用でもなければ大学受験用でもなければ、嫁入り用のアクセサリーでもないところの“生き死に”の英語を話す」と書いています。

アクセサリーの英語が害毒をもつのは、英米の支配者たちの思考だけを注入されてしまうからです。「侵略戦争」という言葉も、これに抗する「民族解放」という言葉も、この世には存在せず、こうした諸国人民のたたかいをも、不法な (illegal) ものであるかのような錯覚を与えてしまうのです。

「生き死に」のたたかいをしているパレスチナの人たちの合法性は、国連憲章と世界人権宣言を基礎に国連が認めたものでした。関連決議はいくつかありますが、その中から二つだけ拾ってみましょう。

The General Assembly,..... Reaffirming the inalienable rights of all peoples, and in particular those of Zimbabwe, Namibia, Angola, Mozambique and Guinea (Bissau) and the Palestinian people, to freedom, equality and self-determination, and legitimacy of their struggle to restore these rights,.... (Resolution No. 2787 (XXVI) of 6 December 1971)

この国連総会決議は、人民のたたかいの合法性や正当性を承認したものです (ちなみに日本は、この時点ではこの決議に対して棄権しています)。しかも、この決議では、これらのたたかいをすすめているものへの支援を義務づけました。

「生き死にのたたかい」をしている人々たちを既成の合法性 (legality) の枠内で切りおとししてしまうのであれば、コトは簡単ですが、それでは今日の世界の問題について、その背景や現実が見えなくなります。

PLOが、パレスチナ人民を代表する唯一で正統な (the sole and legitimate representative of the Pa-

lestinian people) 機関として厳密に規定されるのは、国際社会が、PLOの正統性を認めたからです。ところが、この「唯一正統」は、枕詞のようなもので、それほどの意味をもたないと主張する人もいます。しかし、国際法上のオーソドックスな概念から考えても、ある政権なりそれに準ずるものが、その正統性を認められるか否かは、きわめて重大な外交上の問題であるだけでなく、その政権に代表される人民が国際的な認知を受けるか否かの重大な問題です。

まずパレスチナ人民が sovereignty (主権) を有する national entity (民族的統一体) であるのかどうか、そしてPLOの juridical status (法的資格) がどのような経過をたどって、どのような実体をもって形成され機能しているかが厳密に検討されるべきです。

正統性についてはあいまいにしながらも、事実上の承認 (de facto recognition) を与える外交上の方式もあります。国際法の原則に照らして、PLOの legality を論じたものとしては Romahi 氏の International Law & The Palestine Question (Biblio, 1979) がありますし、逆にイスラエルの非合法性 (illegitimacy) を論じた Henry Cattani 氏の Palestine and International Law (Longman, 1973) などもあります。

しかし、今日の国際社会の大半がPLOを承認しているのは、その厳密な表現として唯一正統を採用しない国々をも含めて、長い苦難を経たパレスチナ人民のたたかいを銘記し、PLOの正統性を確信しているからではないでしょうか。レーガン政権の中東政策が動き出して、PLOの正統性はもちろん、その存在を認めようとししない立場から、さかんにヨルダン・オプション (Jordanian option) が持ち出されていますが、あえて option という表現を使うならば、パレスチナのオプションのみが真の中東平和の道を準備することは、年頭のアラファト議長メッセージが、次のように明言しているところからです。

“...The Palestinian option is the sole option leading to a just and lasting peace in the Middle East. Only it has been confirmed by international legitimacy. We enter this 17th year, armed with faith in our cause, defying the arrogance of the enemy and the US war machine.... This year will be the year of the Palestinian option, the year of the Palestinian miracle, performed by the Revolution and the people.”

関場 理一 (通訳者)

るが、夫人にとっては別世界の出来事なのである。日本はそれほど病んでいるのかも知れない」

♥ 付け加えておきますと、大学生の政治的な活動は、わが国でもあります。これは、その問題とは別だと思っています。

日本人はいつも歓迎しますよ

御主人は何かスポーツを? いえ、毎週のように、今週からテニスを、いや今週こそは×××を始めるといっておりますが、未だ実現しておりません。

— あなたはいかがですか。
— スポーツはちよつと。
— では習い事は?
— 絹絵です。
— 在日外交官夫人の中には絹絵をやられる方が多いのですか、そんなに興味深いものなのですか。恥かしいことに、日本人である私は、その方面に全く知識がないのです。
— 大変面白いものです。日本の文化の根源に触れられるような気がするだけでなく、心もなごみます。
— 日本で会われて印象に残った人物を一人。
— ウーン。いろいろいますが、皇族ではプリンセス・ハナコです。若くて、美しく、大変理知的な方だと思います。
— 皇族に会われることは多いのですか。
— そうですね。公式行事の際にお会いしますし、昨年のアフロ・アラブ婦人の会のファッション・ショーには彼女を招待することができました。
— お国のことを少し伺わせて下さい。
— 地中海沿い特有の少し暑いですが、良い気候の美しい国です。
— 冬も泳げるような温かさですか。

か。
— 冬はちよつと。この冬には久しぶりに雪がちらついたらとも聞いております。
— 観光客はやはりヨーロッパが主流でしょうね。
— ドイツ人が一番多くて、次にフランス人だと聞いております。
— 日本人はあちこちで嫌われているようですが、お国ではいかがでしょうか。
— 大歓迎いたします、心から。

たんしん・短信

アフリカ・アラブ・レディス・グループはひき続き活発な活動を行っています。最近では、四月十四日にNHKを訪問し、ホールでの歌謡番組のリハーサルや「おんな太閤記」などのスタジオを見学しました。
四月十六日には、鹿島映画制作所で、鹿島平和研究所の平泉渉氏や鹿島映画制作所のご協力で、アフリカ・アラブの国々を映像で紹介するために、映画会を行いました。
平島祥男氏制作による、聖地メッサ(サウジアラビア)の、一般では撮影禁止の内部が紹介され、パレスチナ問題や各国の風土、文化を映像で三時間半にわたって観賞しました。
日本側からも、百名以上の婦人が参加し、映画のあとはアフリカ・アラブの各国のお料理に舌づつみを打って、和気あいあいの雰囲気の中で、交流を深めました。



「自身の最新作の絹絵とともに。」

パレスチナ問題で日本人に問う

対話と相互理解をめざして

●日本共産党への公開書簡
●春日一幸氏への手紙

PLO駐日代表事務所では、中東・パレスチナ問題に関する日本共産党の見解（主として「赤旗」の主張に表われたもの）をめぐって、相互理解の呼びかけを行なったが、残念ながら、その後三年を経ても返答がない。本誌は先月号の「PLO駐日代表のニッポン体験」で約束したとおり春日一幸氏への手紙とあわせてここに公開書簡の全文を公表して、日本の知識人の中で広範な議論を呼びおこしたいと考えるに至った。日本共産党はもとより、読者の皆さんからの批判をお待ちしたい（編集部）。

1 日本共産党への公開書簡

中東問題に関する「赤旗」のこれまでの主張（社説・解説・一般報道などをふりかえってみて、そして特に、三月二十四日の主張「イスラエルの新たな侵略行動を断固糾弾する」を検討した結果、きわめて遺憾なことに最も基本的な観点において、とくにパレスチナ人民の民族的、基本権の理解に、いくつかの見解の相違のあることを痛感し、これらの相異点について、あらためてPLOの立場からそ

の基本を次の論点にわたって、明確にし、ておく必要を感じるものである。

「紛争」の根源の分析について

1 第一の問題は、日本共産党はパレスチナ人民の民族解放闘争を、帝国主義と新旧植民地主義に対するアラブの民族解放闘争の前衛に位置する闘争として位置づけていないことは驚くべきことである。しかも、貴党がこうしたパレスチナ

人民の民族解放闘争を支援するという党の活動としての関わりと、この問題に対する態度と理解を、今日の世界における帝国主義とシオニズムに反対する国際的な諸国人民の共同の重要な一部であるとして、戦略的にも戦術的にも、この闘争を重視しているかどうか、きわめて不明である。

2 第二には、貴党が、シオニズムをいかに分析し、これとの闘争をいかに位置づけているかがあいまいである。いわゆる「ユダヤ人問題」を最大限に利用して、シオニズムはファシスト的で反動的な政治運動を行ない、ユダヤ教徒たちの苦難を逆手にとってパレスチナ人たちに苦難を強制し、帝国主義の手先としての役割を果たしている。

3 第三に、ユダヤ教徒を貴党はどのように見ているか、という問題がある。言うまでもなく、ユダヤ教は宗教であり、一般的に「ユダヤ人」と言われている人々はユダヤ教を信ずる宗教者である。これに関して、貴党は、ユダヤ教徒

の解決の典型として提示しようとしているのである。

このことから考えて、日本の進歩勢力が二つの対照をなす解決案の典型をなぜ分別することが不可能なのか、そして正当な闘いを支援することを躊躇しているのか、その理由が理解できない。しかも前衛党としての日本共産党が、マルクス、エンゲルス、レーニンの「ユダヤ人問題」とシオニズムについての分析をはじめ、「ユダヤ人問題」でのソ連および東欧社会主義諸国の経験をも含めて十分に認識していなければならないと考え

る。中国、ベトナム、朝鮮、カンボジア

を一つの民族と考えているのか、更に、シオニストたちが主張しているように、シオニズムの運動を「民族解放運動」と見ているかが、これまでの貴党の態度表明では鮮明にされていないと考える。

4 第四に、中東危機と「アラブ・イスラエル紛争」の根源が何であるか、この点が貴党の機関紙と刊行物によって、未だに鮮明になっていないことである。つまり、貴党は、パレスチナ人民が祖国の地のパレスチナに対して保有している民族的権利を含むパレスチナ問題が、中東問題の「紛争」の根源と考えるのか、あるいは、それを二次的な要素と考えるのか、という問題である。中東危機と「アラブ・イスラエル紛争」の根底にあるものは、外来の帝国主義勢力とシオニストたちによって植えつけられた地域主義的排外主義的な敵意に根ざしたものであり、帝国主義・植民地主義的支配権が分断し支配する政策によってこの地域の彼らの権益を守るために、戦略的に重要な地理的位置にあるこの地域に対す

る前進基地を樹立するため、つくり出されたものである、と貴党は考えるのかどうか。更に、こうした帝国主義・植民地主義の利益を守るための政策によって、アラブのユダヤ教徒も含めてアラブ諸国人民が利用され、この地域のさまざまな排外主義的でファシスト的な反動勢力が中東地域における諸国人民の利益に反して反帝・反植民地闘争の破壊者（「第五列」）として利用されている事実を、貴党はどのように分析し、これに対していかなる闘いを進めようとしているのか。

抵抗の権利について

5 第五に、パレスチナ人民の抵抗をどのように考えているかが鮮明でないのみならず、幾つかの重大な誤った認識があることを指摘しなければならない。

今日、パレスチナ人民の抵抗は、全世界の進歩的で著名なユダヤ教徒たちを含むすべての平和・進歩勢力の支援と支持を受けている。紛争の解決の為に、宗教や人種にかかわらず、人間の尊厳と名誉を守る勢力と、これに敵対する勢力との対決が、紛争の基本にあるものであると、進歩的なユダヤ教徒たちは分析している。つまり、パレスチナ人民の闘いは、パレスチナの地における、更には中東地域の、様々な異なる社会共同体が共存できる平等と民主主義的秩序の確立が必要であり、宗教的、人種的少数者の問題を解決する為には、人民を分断し、一つの社会共同体が他の社会に対して、暴力とテロ行為によって、一方のみの社会的あり方を強制してゆくやり方に終止符を打たなければならないと分析してい



ア、ラオス、モンゴルなどアジアの諸国が、シオニストのイスラエル国家にいかなる態度をとり、パレスチナ人民の闘争をいかに支持しているかは、ここで言及するまでもないと思われる、ラテン・アメリカの諸国についても同様である。

「ユダヤ人問題」についての経験から、社会主義諸国と共産党諸国の間では、シオニズムとユダヤ教との区別は明確になされており、この問題に対する社会主義諸国と共産党諸国の態度は、極めて鮮明なものである。マキシム・ロダンソンやジャック・バリック、アイザック・ドイッチャー、アブラム・レオン、アルフレッド・ローザンタール、エルマー・バーガーなどその他のヨーロッパの著名なユダヤ系の知識人たちは、アインシュタインを含め、シオニズムと「ユダヤ人問題」、更にはパレスチナ問題についても態度を鮮明にうちだした人々であり、またイギリスの歴史家のアーノルド・トインビーは、歴史家の立場から、シオニズムとユダヤ教を峻別し、パレスチナ問題の解決の方向を示唆したことは、今日でも私たちの記憶に新しいものである。

テロリストはどちらの側か

6 第六に、いわゆる暴力とテロ行為の問題があるが、これに関連しては、ベトナムの独立と自由の為に戦った解放勢力と闘士たちが、その長い闘いの中で帝国主義・植民地主義者の政治宣伝によって幾度となく「テロリスト」あるいは「殺人者集団」という呼び方をされたかについて言及するまでもないと思われる。

イスラエルの設立三十周年に際して日刊の英字新聞に掲載された貴下の文章を拝見し、大変に悲しく思いました。イスラエルに対する貴下のかかわりは、私にとって驚きであるだけでなく、貴下が、かねがねアラブ問題で公平な立場から関心を示され、発言されていただけに、今日の国際社会と国連においても確認と承認を得ているパレスチナ人民の大義を具體的に支持する発言を期待していた人たちに、とても衝撃であったと思います。私個人は、サウジアラビア大使官邸で訪日されたナワーク皇太子の歓迎レセプションで貴下にお会いした直後であっただけに、貴下のサウジアラビア訪問の体験をもとに、アラブと日本の友好と協力

2 春日一幸氏への手紙

を進展させる方向で貴下の態度がうち出されるものと期待していました。しかし残念ながら、貴下はアラブと日本の双方の人民の相互の利益を無視したのみならず、パレスチナ人民の存在をも無視したのです。日本イスラエル親善協会の会長をひき受けられるか否かは、貴下の権利ですが、貴下はそのことによつてではなく、イスラエルのファシスト的で排外主義的な政策とシオニズムを支持することによつて、パレスチナ人民の人間としての基本権と民族的諸権利を無視したのです。シオニスト運動を国連がどのように非難したかご存じですか。イスラエルが私たちパレスチナ人民に対して非人間的

シオニスト、シオニストの植民地主義者達とが全く識別されていない。侵略者も、その犠牲者も同等であると考えるべきだとも主張するのであるうか。

民族自決権と民族的権利

7 次に問題にしなければならぬのは、民族自決権と民族的権利についての認識の誤りについてである。「主張」の中であなた方は、問題解決の核心として「パレスチナ人民の民族自決権の確立」を提起している。民族自決権は民族的権利の一部ではあるが、民族的権利そのものではない。民族的権利という場合、とりわけ国連憲章と国際法および国連総会決議で規定されている内容は、パレスチナの祖国の地に対しパレスチナ人民が保有する権利、独立した自らの祖国を樹立する権利、いかなる外部の干渉もなく自らの未来を決定する権利のことであり、あらゆる諸国民に保証されている諸権利を民族自決権のみで表現するだけでは不十分である。それとも「主張」の立場は、こうした内容をもった民族的権利はパレスチナ人民を除く世界の諸国民には適用されるものであり、パレスチナ人民に与えられているのは、自決のみであり、その意味する内容はイスラエル側が主張しているように、シオニスト侵略者達のもとで賦与される自治権であると解釈すべきでも言うのであろうか。



春日一幸様
一九七八年六月二日

敬具

私たちは、正義、平等、人間の名誉と尊厳が全世界のすべての諸国民の為のものであり、特定の人民のみに保証されるべきものではないと確信するものである。貴党の幹部たちとのこれまでの話し合いから感じられることは、極めて遺憾ではあるが、貴党が国際的な責務を戦略的任務として考えず、国内的な条件によって左右される戦術的な問題としてのみ受けとめていると断言せざるを得ない数々の発言に遭遇していることを表明せざるを得ない。

結びとして

私はパレスチナ解放機構を代表し、貴党とのこれまでの同志的関係を基礎とし

て、お互いに批判と相互批判を行い、共同の闘いを発展させてゆかなければならぬという共通の責務を負う者としての立場から、卒直に私たちの見解を公開書簡の形で提起した次第である。こうした卒直な批判と相互批判によつて、相互の理解を深め、闘いの経験を豊かなものにしてゆかなければならぬという基本的な機能を果たしてゆきたいという願いに基づくものであることを付け加えておきたい。

パレスチナ人民とアラブ諸国民の闘いを支援する為、いかなる決定を行ない具体的の方針を作りあげてゆくかは、言うまでもなく、貴党の自由である。しかし

ながら、まちがった認識のもとに一定の分析を行うことは、私たちパレスチナ人民との連帯を推進する上で、これまで果たした役割と現に果たしている役割を十分に認識している私たちの立場からは、決して好ましいことではなく、また、正しいことでもないと言わなければならない。なぜなら、そうした誤った認識が貴党の公式機関紙である「赤旗」を通じてなされることは、パレスチナ人民の正義の闘いを歪めるものであり、貴党の党員をはじめ、貴党の影響下にある多くの大衆の判断を誤らせるものであることを危惧するからである。

一九七八年三月二十八日
日本共産党中央委員会幹部会委員長

宮本顕治殿
日本共産党「赤旗」編集長
荻沢忠雄殿

**パレスチナ解放機構東京事務所長
ファトヒ・アブドルハミード**

追伸 この公開書簡は、三月二十四日に行った電報による見解表明の要請と、同日に送付した手紙による見解と説明の要請を行ったにもかかわらず、三月三十一日現在、何らの応答も寄せられていない。前記の電報と手紙で表明した内容を補足する目的でまとめられ、送付されるものであり、貴党との対話の出発点として近い将来に公表する用意のあることを付記します。

この様な中傷と非難は、フランスおよびアメリカの侵略者たちの不法な侵略を正当化する為のものであった。独立と解放、人間的な権利および民族的権利を求めて闘っている人民に対しては、今日でも「テロリスト」や「殺人者集団」という中傷的な呼称が使われており、特にパレスチナ人民の闘いを「テロと暴力行為」とシオニストたちが侮蔑的に呼ぶび方についても、それによって一般大衆が欺かれることのない様に真実を明らかにする責任がある。「暴力とテロ行為」の問題については、次の諸点が指摘されなければならない。

第一に、「国連憲章」と「人権に関する世界宣言」は、いかなる人民も、自らの民族と人民の権利を守る為には、軍事闘争も含むあらゆる可能な手段を行使する権利を有することを保証している。この権利は世界の他の諸国民には適用されるが、パレスチナ人民には適用されないであろうか。何故にパレスチナ人民だけが、祖国の地に対するシオニストのファシスト的で野蛮な侵略と、同胞たちの大量虐殺に対して、一切の武器を放棄して対決せよと要求されるのであろうか。何故にパレスチナ人民だけが、世界の世論と非暴力に依拠して自らの民族的権利を守るための唯一の手段として、素手で残忍な侵入者達に打ち向わなければならないと要求されるのか、私達には理解できない。

しかも驚くべきことは、このことを要求し、そのように助言しているのが、日本の進歩的政党であることである。

第二に、一般的な論評を加える者の側

であつても、いかなる人民の民族的権利であれ、非人間的でファシスト的な野蛮な侵入と侵略に対して、それらを守る為に行使する権利としての人民の抵抗と、侵略者たちの一切の破壊とテロと虐殺とを識別する使命がある。更に、一つの民族が自らの権利を守る為、軍事闘争を民族的権利を回復する為の一つの手段として反撃を行使する権利と、無責任で冒険主義的に展開される左右小児病的急進主義者達の行動とを識別する使命がある。これらの問題を混合することは、いかなる責任ある進歩的政党にとつても、いかなる意味でも取るべき態度ではない。

第三に、これら一連との関連で、作戦の過程における民間人の安全問題が、ベトナムの解放の為に戦った自由の戦士達に対しては提起されず、何故パレスチナ人民の闘いに対してのみ提起されるのであるうか。いわゆる作戦の過程における民間人の安全について問題にする人達は、ベトナムの同志達が作戦の過程でこれらを識別する為にいかなる措置をとったか、また、侵略軍と民間人を作戦の中でいかに区別して攻撃したかを教えてほしいものである。

正当な権利として保証されている反撃の作戦を行使したパレスチナ人民が非難され、イスラエルが行っている民間人を攻撃目標にした、野蛮で残忍な大量虐殺が非難されず、パレスチナ人民の権利を踏みにじる為の反撃を行使しているというイスラエルの口実が何故に正当化されているのであろうか。

「主張」では、侵略の犠牲となつていくパレスチナ人民と、侵略しているファ

8 次にパレスチナ人民とアラブ諸国民の解放と独立をめざす闘いの性格づけが、あいまいである点を指摘しなければ

解放闘争の「道理」について

9 更に、この機会に一つの批判を加えるなら、国内問題と国際連帯の課題の結合の問題について、決定的な認識の違いがあることを指摘しなければならぬ。

すなわち、今日の進歩的人民にとって相互に切り離すことのできない二つの戦略的任務がある。一つは、人民の民族的な願いを進展させる国内的な任務であり、もう一つは、共同の敵に反対して、共通の大義と理想のために統一した闘争を展開し、他の国々の進歩的な諸人民の願いの実現を支援してゆく任務である。

「主張」で「道理にかなった方法で推し進められてこそ、広範な国際世論の支持を受けて成功的に進進する」との考えを述べているのは、今日までのパレスチナ人民とアラブ諸国民の闘いが、道理にかなった方法で進められてこなかったという見解を表明したこととして受けとめられてしかるべきであろう。正当な民族の抵抗権としての強力を行使したことが「道理にかなった方法」でないとするなら、パレスチナ人民とアラブ諸国民は、非暴力の手段を行使すべきであるとも主張するのであろうかと再び問いかけてみたい。この点に関しては他の解放闘争を戦っている人民に対して、貴党が考えておられる道理にかなった基準によって必要な闘争の展開の方法を助言された例があるとすれば、それを私たちに示していただきたい。

国際連帯の課題について

あるアラブ人との出会いから

木村郁子

なぜ日本にはアラブ・
レストランがないのか

ある時、私はアラブ人のS氏と食事をする機会をもった。私はかねてからの疑問をS氏にぶつけてみた。「何故、東京にはアラブ・レストランが一軒もないのかしら。この六本木にも……」私はS氏の返答を待った。

「現在、アラブと日本は経済面で相互に交流をもっているが、日本のビジネスマンはビジネスだけにしか興味を持たない。他の面で交流をしようとしなさい、その上私たちが持つ重要な問題を理解しようとしなさい。」

S氏は、私の力量に合わせて、平易な英語でわかり易いコメントを与えながら「東京にもアラブ・レストランをつくるべきだ」と最後に付け加えた。しかし、彼の静かではあるがその強い口調に、私はアラブからのひとつのメッセージを感じとった。ひとりのヤバーニーヤ（日本人女性）に与えたS氏の提言は、やがて私自身の「宿題」となって、頭の片隅に固定化された。同時に私は、机上では追究しきれないテーマ

がそこにあるのを感じていた。

七三年の石油危機以来、アラブとの文化交流の必要性が巷で叫ばれ、中東問題の専門的な研究所建設が要請されるようになってから久しい。にもかかわらず、在日アラブ人たちにはいまだに東京の街中で、郷土の味覚に出会うことはない。この事実には、ある意味で文化交流の貧困さを露呈し、彼らとのコミュニケーションの乏しさを反映してはいないだろうか。また、アラブへの関心はいまだに微弱であり、多くの日本人のアラブ観が、少なからず現実からかけ離れたところにあることも否めない。それはイスラムへの誤解と偏見から来るものもあり、多くの場合、古今を通しての西側先進諸国の正確さを欠いた情報の産物でもある。

一冊のパンフレット

との出会い

そして私自身、この問題に関しては、久しく大学受験時の世界史の知識を越えるものではなかった。しかも、当時、私の関心はパレスチナよりも遙か東にあったのである。

私はかつて中国語を学んでいた。大学に入学する以前の話である。し

かし私の興味の中心は中華人民共和国ではなく、それより少し南にあった。マオイズムへの思想的傾倒者にはなり得ず、手離しの中国讚美論者でもなかった私は、興味の方向をメイランランド・チャイナではなく、むしろチャイニーズ・レジェンツ（華僑）と現地のナショナリズムに向けていた。そして何よりこの問題から出発して行きあたったのは、発展途上国の経済構造と不均衡な貿易体制の中に見出した、わが日本の経済侵略の問題であった。「エコノミックス・アニマル」、あるいは「バナナ」（黄色い皮をつけているが、中身は白い、つまり西欧人の意識をもって）と呼ばれる、東南アジア地域における日本人のニュー・コロニアリズムの実態であった。私が初めて小田実氏の講演を聴きに行ったのもこの頃である。

今まで大学教育を否定していたにもかかわらず、私は急に大学へ行つて勉強したくなった。その時点で私はまだこの大学を受験するの決定まらないうちに、ゼミは国際政治と決めていた。自由でグローバルな視野から改めて日本と東南アジアの関係を研究したかったからである。大学二年の秋、私は大学祭の会場

え、以後、彼らのパワーと情熱に魅了されるひとりとなったのである。役に立たなかった

既成の「世界史」

こうして私は三年になると、ゼミに入るための試験レポートで、春休みに旅行したエジプトの、いわば見聞録を書いて提出した。このレポートの中で自ら提起した「アラブは一つか」というテーマは、その後ずっと私のアラブ研究の根底を貫くことになった。また、私は地域研究に取り組むと同時に、私自身さまざまな既成概念への挑戦を試みなければならなかった。

まず、少なくともパレスチナ問題をはじめ中東問題に関しては、高校

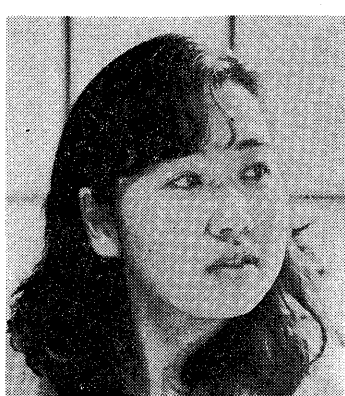
時代の世界史の知識はほとんど役に立たないものである。かつて私は一度でも第三世界の側から世界史を考えたことがあったろうか。私たちのゼミの統一テーマである「ナショナリズム」を考える上で、この自問は必然的な経路から噴出した。

現代世界の歴史的特徴は、第三世界の民族解放運動の推進と植民地体制の崩壊にある。従って、これらの波から生まれ出た歴史家や社会科学者が語る「世界史」は、私の既成概念への反省を促し、同時に新たな角度から歴史にアプローチすることを教えてくれた。こうした視野の柔軟性は、今後パレスチナ問題をはじめとするアラブの諸問題にアプローチする上で、極めて有意義な出発点となった。それはやがて、アラブ地域の勉強と平行して南北問題を迫り作業へと導いていった。さらに、国家と民族という両概念の間の結びつきと歴史と現状を観察することによって、はじめてアラブの外枠をつかむことになった。

アラブ世界と

パレスチナ問題

アラブ世界においては、伝統的に



木村郁子（きむら・いくこ）

一九五五年、東京生まれ。現在、学習院大学法学部政治学科四年在学中。都立九段高校卒業後、中国語の専門学校へ通った後、大学へ進み三年時に国際政治のゼミナールなどでパレスチナ問題をはじめアラブ問題を研究。趣味は茶道で、琴もひく。卒論（ゼミ論文）ではパレスチナ問題に本格的に取り組んでいる。

存在する信仰共同体の概念を基にしたアラブの帰属性と、地縁的な結合をもつ国民国家主義という少なくとも二つのカテゴリーが存在する。前者は文化的、宗教的ひろがりをもつナショナリズムであり、後者はいわば帝国主義が勝手に引いた国境の中で、国民国家の形成をめざすのである。両者は私の基礎テーマとなっているが、さらに私はこの延長線上に再びパレスチナ問題の本質とその現実につかむことになった。

アラブの民族的性格、あるいは帰属性といったものは、帝国主義経済の浸透における影響の結果から生まれるのであるが、アラブの歴史において、これが育まれる過程にアル・ファタハ運動がある。

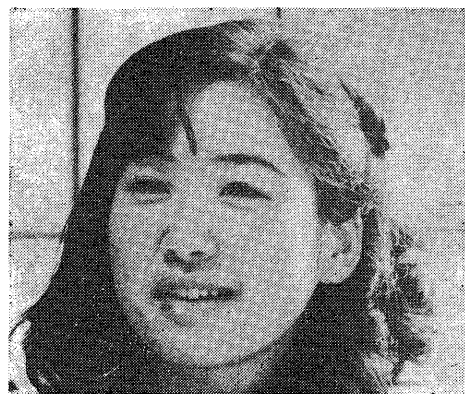
一九五六年に結成されたアル・ファタハはその運動において、いかなる外国の保護も受けず、帝国主義に對抗し、祖国奪還のための闘争を宗としていた。

私はここで、パレスチナ人の民族自決、国家主権、祖国復帰をめざし、シオニズムやそれと結びついた大国の圧力を排除して自らの権利を回復するという、パレスチナ問題の本質に迫ることになった。そしてまた、この問題の解決がアラブ民族に

とって緊急課題であり、アラブの大義がここにあることを知らされたのである。同時に、S氏が言った「重要な問題」の意味をここに悟った。

現在、アラブは政治・経済、軍事上、各国に思惑があり、アラブ諸国が表面上、分裂や統合を繰り返しながらも将来、連帯の道を歩んでいくか、それとも国民国家の形成を強めていくかという問題は、国際政治や比較政治学上において、重要課題であり続けるだろう。しかしながらパレスチナ問題に関して、O A P E C事務局次長のアルワタリ氏の発言は注目に値するものである。

「政治と経済は表裏一体を成している。パレスチナ問題は、アラブ民



思い知らされた

自分の無知

A・Z氏は親日家で、度々日本を訪れる人である。南イエメンからやって来た、この若く、馴きんな空手家を紹介されるまでは……。

私は拾取のつかない頭の中で、一つの明確な結論に愕然とした。自分はパレスチナ問題など全く理解していなかったのではない。シオニストたちが醜態で卑劣な方法で創り上げる既成事実の現場を目のあたり

家は、ウルフマン・ジャック（アメリカのDJ）の声帯模写で自己紹介を終えると、ジョークの爆弾を次々と破裂させた。彼のジョークの軽妙さには、アッラーも腹をかかえて笑うだろう。私は、灼熱の太陽が生んだアラブの「陽」のダイナミズムにしばらく酔っていた。同時に、アラブ人と空手の関係に興味をもった私は、アラブの子供たちに空手を教えるA・Z氏自身の仕事について、質問を開始した。

レスチナ人民の慟哭、そして民族の誇りと歴史を汚され、否定されたアラブ民族の怒りを、私は全くわかっていなかったのだ。私はただ、パレスチナの人々が遭遇した不幸なできごとを単なる歴史的事実として、解放闘争の理論として知っていたに過ぎない。それは全く机上のものだった。その時以来、私は彼らの気持ちを探らずにはいらなかった。マフムード・ダルウィーシュやファウジ・アルアスマールの詩。ガッサン・カナファニーの小説。昨年夏「アジア芸術祭」で見たジュマーナ・フセイニーらの絵画。

「どこで空手を教えているの。」日本語が僅かに話せる彼は、その瞬間、真顔で私を見て言った。「パレスチナ」。

『オリブの樹は燃えた』（本誌一月特別号）の中で、ズック靴のいわれなき盗みの嫌疑をかけられたハリスの教え子、ユーセフはいみじくも叫ぶ。「パレスチナがおれの故郷であるように、この靴はおれのものだ」と。

私は一瞬息を止めた。一瞬ドラマを見たような気がした。同時に私は、混乱した頭の中で何かを探した。「イスラエル……」私がこう訊き返した時、彼は無言のまま、頭を大きく左右に振った。私はそのあとの沈黙をどうすることもできなかった。

パレスチナ問題は、パレスチナ人が民族的権利の回復を果たし、パレスチナに帰れるようにならなければ、絶対に解決したことにはならないだろう。S氏から与えられた私の「宿題」は、同時に私たち日本人全ての将来をかけた、重要課題であるのかもしれない。

「パレスチナ研究誌」最新号

——アメリカ黒人の役割を特集

「パレスチナ研究誌」の最新号（一九八一年冬季号）38号は、パレスチナ問題に対処するアメリカ国内の黒人の独自の役割と運動を取り上げ特集としている。（写真）

ロナルド・ウォルターズの「中東における黒人のイニシアチブ」ジェイク・ミラーの「黒人の中東紛争観」ロバート・ニュービーの「アフロ・アメリカ人とアラブ人」は、アンドリュー・ヤング米国国連大使の辞任

いることは注目に値するし、それを取り上げた意義は深い。

アーネスト・ウィルソンIIIによる「オリエンタリズムある黒人の視点」と題した論壇時評は、アメリカ黒人のアイデンティティが従来の西欧中心主義に挑戦するという意味で東洋「オリエンタル」的なものと接近・転換しうる道があることを示唆している。この傾向を促すのに、パレスチナ問題が刺激因としてあると解されている点が興味深い。

アメリカ黒人とは一応無関係であるが、アルフレッド・モレールの論文「人権蹂躪—イスラエルと南アフリカ」は、誰の目にもあからさまな人種差別主義と映るアパルトヘイト政策を世界中から糾弾されながらも遂行する南アフリカと、シオニストのイスラエル国家との性格の根本的共通性を解き明かしている。

また、イスラエルのパレスチナ人と南アフリカの黒人の置かれた状況を対比しながら、その酷似性を浮きぼりにしている。イスラエル国家の本質を理解する上で、非常に有効な比較分析である。ほかに書評、過去数年間にフランス語で出版された中東・アラブ・アジア世界にも拡大して

ラブ・パレスチナ関係の注目すべき三十冊の図書の短評を付けた文献目録、雑誌目録、特別資料、海外論調などが収録されている。（英文で一九九ページ）オリジナル・タイトルは、Journal of Palestine Studies

「パレスティン」誌最新号の読みどころ

PLOの国際情報誌（月二回、ベイルート本部発行）の「パレスティン」は、一九八一年（第七巻）となって、一月の新年号、二月上・下旬号（第二号および第三号、三月上旬号（第四号）が次々に発行されている。

第一号は、アラファト議長の新革命16周年記念演説、一九八〇年の占領地域における弾圧と抵抗の記録、イスラエルの諸新聞に見られる人種差別主義の実態、ナチズム・シオニズム・英帝国主義の密接な三角関係に関する論文、モナ・サウディ女史

編集室

によるパレスチナの現代美術の紹介等々、盛りだくさんの内容。第二号では、第三回イスラーム首脳会議報告のほか、「イスラエルの入植イデオロギーとパレスチナ人民分断」（第三号にも）と「イスラエルゲート」と不可侵領域」と題する二論文が特筆に値する読み物となっており、第三号では、国連人権委員会による占領地域の人権抑圧の実態調査報告（第四号にも）や、レバノンにおけるレバノンのアラブ兵とパレスチナ兵との共同歩調報告などが読める。（写真）最新号では、イラン・イラク戦争の収拾に努めるイスラーム調停団の中でのPLOの活発な動きなどとともに、毎号にあるように、イスラエルの犯罪行為をあますところなく伝えている。（抄）

※入手ご希望の方は、PLO駐日代表事務所または、パレスチナ研究所（IPS）の日本総代理店である（株）ブリオ（東京都千代田区三崎町二一—二二エコービル）電話03—二六三三七—一八九へお申込下さい。「パレスチナ研究誌」は一冊一、三〇〇円（送料二〇〇円、情報誌「パレスティン」は通常号で一冊三〇〇円、新年特大号は一、〇〇〇円。両誌の定期購読についてもブリオにお問い合わせ下さい。

某月某日 大阪で本誌の定期読者を拡大するために積極的に働きかけがなされている。その先頭に立っておられる鉄村春吉氏から「とりあえず百冊を」と注文。

某月某日 新しい方式でしかも減賃しておくり出す第一号。チーフの広河兄は西へ向かった。いま広島、九州へと写真展を開催している。西海の潮風をもって帰京するだろう。（関）



アラビアのロレンスと アイルランド

■鍵和田 良輔
フォト・ジャーナリスト

シリーズ——銀色の亡霊、その足跡④

果てしない砂漠が広がるアラビア半島。その中央部を、地中海に面したベイルート・ダマスカス、ハイファを起点にトランス・ヨルダンを経てメディナへと南下するヘジャズ鉄道、メッカへの巡礼鉄道が敷かれていた。折しも、遠く煙が見え、やがて蒸気の音とともに列車が近づく。手前、砂丘の陰にはベドウィンの一団が長いモーゼル銃を構えてこれ待ち受けていた。機関車がま近にさしかかったとたん、ダイナマイトの轟音とともに線路が吹きとぶ。脱線し、ぶつかり合い、ひしゃげながら横転する車両。トルコ兵と乗客の悲鳴。その瞬間、ベドウィンの銃がいつせいに火を吹く。動転し、逃げ場を失ったトルコ兵がバタバタ倒れる。その後、白いアラビア衣裳をなびかせて立つ男。これぞアラビアのロレンスの一場面だ。一九六二年イギリスで製作された映画「アラビアのロレンス」をご覧になった皆さんもきっと多いことと思うが、さすが本場でつくられただけのことはあってキャストイングも見事だった。主演ピーター・オトゥールはアイルランド系アメリカ人だった。

そしてロレンス自身もまた、アイリッシュだったのだ。では、そのことがどんな意味を持っているのか。彼の生いたち

に触れながら、彼がどんな人物で、アラブとどのような関わりを持ったのかを追ってみよう。

アングロ・アイリッシュ

アラビアのロレンス、本名トマス・エドワード・ロレンスは、一八八八年、北ウェルズはトレマドックのうらぶれた下宿屋で生まれた。父トマスはアイルランドに広い土地を持つ貴族だったが、本来ならば、こんな場所で子供を儲けるはずではなかったのだ。トマス代々の家はチャップマン家といい、一族はサー・ウォルター・ローリーにもつながる由緒正しき家柄で、元をたどれば十六・十七世紀にかけてイングランドからアイルランドに渡ったとある。次いでピューリタン革命の折、独裁者クロムウェルのアイルランド侵略があったわけだが、その際この一族は、侵略軍の一翼を担ってウェストミース州に新しい土地を授けられ、以来地主として十九世紀に至った。彼らは、何百年もの間イングランドから支配されつづけたカトリック系の貧しいアイリッシュとは全く逆の、支配者の手先となって入植した人々で、アングロ・アイリッシュと呼ばれている。T・E・ロレンスの父トマス・チャップマンはこのようなくぐまれた家系を持って、しかも一段上の貴族の娘と結婚していたのだが、

彼は夫婦生活の不满から、子供の保母に雇ったスコットランド娘に手を出し、あぐくは家を捨てて駆落ちした。

T・E・ロレンスは、この結果出来た二番目の子供だったのである。その後、一家はイングランドを転々としたが、四人の子供が学校に通いはじめるオックスフォードに居を固定した。両親、とくに母親のサラは自分たちの「犯した罪」の重さから宗教心を一層つものらせ、教育にはこのほか厳格であったという。

極めてピューリタン的でありながらそのくせ内縁関係でしかあり得ない夫婦は、秘密の露見が社会的信用の失墜につながることを恐れ、息子たちさえ過去未来へと現実から遠ざけようとした。オックスフォードに入ったロレンスが考古学の世界に踏み出すにはそんな背景も手伝っていた。

由緒正しい生れなら或いはイートン校から外交官への道もあったかも知れないのに、階級社会イギリスは、どこまでも非情だったのだ。「オックスフォードは、無限の将来を約束する夢のような町でありながら、同時に、生れと財産が決定的に物をいう、浮き世の縮図でもある。」「左斜線の楯の紋様（庶子を表わす）は海賊のどくろ旗と同じことだ」（D・スチュアート、上掲『秘録のロレンス』講談社文庫。これは見事な本なので、ご一読をお薦めする）。

イギリスの情報員として

そんな彼は一九〇九年、夏期休暇を利用して、遺跡調査の旅に中東へ旅立つ。だが、この時すでに、彼にはもう一つ別の任務が与えられていた。〇〇七でおなじみの英諜報機関は何と一五七三年にサー・F・ウォルシンガムによって設立されて今日に至っているのだが、世界を牛耳った小さな島国は情報網がそれに追いつかず、台所は常に火の車であった。こんな学生たちにも、触指が伸びていくというわけだ。おまけに、当時のイギリスにとって、閉ざれた国トルコ帝国の情報源はワラウズ一つでさえ欲しいものであった。特にこの年、ドイツの伸した腕、ベルリン・バグダード鉄道がユーフラテス川のどの地点に鉄橋をつくるのか、重大な戦略上のポイントも掴めずいたのである。ロレンスの目的もまづは

これを探り当てることになった。

彼のこのような側面は一九一〇年暮から四年間、シリア北部の遺跡を中心に発掘調査活動をつづけるようになってますます強まった。考古学のロマンとは裏腹に、ロレンス・オックスフォード大学考古学教室・大英博物館・イギリス情報部は一本の糸で結ばれていたのである。時まさに世界が第一次大戦へとなだれこむ状況下、ドイツの三B政策とトルコ参戦の行方は大きな「鍵」となっていた。

一九一三年、ロレンスを含む派遣軍が南パレスチナに入った。この地域はイギリスの統治下であると同時にトルコ支配下にもあった。そこで彼らの表向きは「トルコ側の疑惑を和らげるためヘブライ人の通った巡路に関する調査とされた。そして翌年には大戦が勃発。沈黙をつづけるトルコは、その年の暮近く、ついにドイツ側について参戦に踏切った。

イギリスの対トルコ戦略は外務省下のアラビア局（カイロ）とインド総督府下のインド局（ボンベイ）が並立しており、互に西と東から先陣争いしていたのだが、大戦で軍務に組みこまれたロレンスはカイロに配属された。インドのように多数のイスラーム教徒を抱える植民地を持つていたイギリスは、何としてもトルコ皇帝のジハード（聖戦）宣言を無効にすべく聖地メッカから対トルコ反乱を工作する必要が生じた。また、三大大陸

をつなぐパレスチナの奪取はスエズを生命線とするイギリスにとって欠くべからざる戦略方針であった。一九一六年三月末、ロレンスは密命をおびて紅海を南下、ヘジャズに上陸。イギリスの意向に添うならば何よりも、メッカの宗主ハーシム家のフェイサルを抱きこむ必要があった。フェイサル・マクマホン協定もこの線に添って交されるのだ。ロレンスがベドウィン軍の最高司令官に選んだのはフェイサルの息子ファイサル。それまで、ろくに軍事訓練も受けたことのないロレンスはこうして、彼の性格に最も合った軍人としての暮しを見出したのであった。

引き裂かれた魂

両親やイギリスに対する憧憬の念と憎しみ。貴族趣味と権威へのあこがれ。異郷の地東洋の、それもアラブの遊牧民に見出した心のやすらぎ。先に引用したD・スチュアートは次のように語っている。「ロレンスのように……事情の多い家庭環境で、愛国心が強く規律にあこがれる人間、しかも母親の影響から、女性との接触を好まず、結婚を一種の罪のように考えるピューリタンにとっては、男だけの世界である軍隊は、心惹かれるものがあったのだ」。中世に光をあてたメッカの王家、アラビア遊牧民の封建主義を愛したロレンスには、アラブの他民

族に農耕民、とりわけパレスチナ人などはまるで目に入らなかった。それどころか彼は、ハーシム家の国家をつくるためには在英ユダヤ資本をあてにさせた。だが、このロレンスに対して、アラビア半島の新しい底力は常にイエーメンからルバーアルハリ砂漠を北上して湧き上がってくることを感じとっていた男がインド局にいた。セントジョン・フィルビー少佐はイブン・サウドを押し立ててサウジアラビア建国に助力するのである。ネジド（リアド）から見れば、トルコ女性を妻とし、西洋文化にも深い造詣を示したメッカのフェイサル一族はかなり異質に映っていたのだ。

結局のところ、T・E・ロレンスのような男を育んだものは何であらう。「アングロ・アイリッシュ系のプロテスタントであり、彼等の住むジョージ王朝風の館は、代々、英国きつての勇猛な戦士や、情け知らずの頑迷な連中を生み出したのであった」（前掲書）。ロレンスの生涯を振り返るとき、私たちの前には、同じアングロ・アイリッシュでありながら彼と対照的な道を歩んだラファディオ・ハーンの姿が、きつと浮かぶはずである。

おことわり 特集のため、PLO駐日代表のニッポン体験、アラファト物語などの連載は休みました。（編集部）





びらーでいのサロンです。ご自由に
ご意見をお寄せ下さい。
お待ちしております。

文化面の紹介を

いつも、編集に払われている御苦労に対し敬意を表します。現在の状況につき、いろいろ考えさせられたり、啓発されたりしておりますが、いまだし、文化面の（とりわけ歴史など）御紹介もほしいと念じたりしております。（千葉県 T・I）

新たな心構えで

昨年中はいろいろお世話になり、大変感謝しております。卒論が思うようにまとまらず、何か月も無駄な日々を過ごしてしまいました。とにかく提出にこぎつけました。四月からようやく社会人となる

悪質なイスラエル軍

既成事実として、パレスチナの「国家」は存在している。なのは、パレスチナの地だけである。ナフム・ゴールドマンの論文に対するアブドルハミード氏の批判は全く正しく、私は支持する。今や、恐れをなし、逃

げようとしているのはイスラエルである。彼らは恐れの中で、再び南部レバノンの難民キャンプを攻撃している。日本ではハイジャッカーゲリラとして名の知れたライラ・ハレド女史。パレスチナの婦人たちの記事を読み、ハレド女史だけでなく、闘うパレスチナ婦人たちは、日本で温湯につかっている私に、これでいいのか？と考えさせられる。パレスチナには学ぶことばかりである。不当にキャンプ生活をしいられているパレスチナ人民や占領地域にいるパレスチナ人民の生活状態や生の声をもっと聞きたい。

また、イスラエルによる無法な攻撃がレバノンのパレスチナ人民を苦しめていると聞く。平和な日本にいる私たちに想像もつかない悲惨な状態がある。子供たちが殺され、女も男も殺されていく。これ以上の不必要な攻撃をやめさせるためにも、悪質なイスラエル軍、イスラエルの正体を暴いてほしい。（神奈川県 M・I）

お金の支援だけでなく

「PLOの友」キャンペーン

の参加呼びかけを読みました。私も、ぜひこのキャンペーンに加わりたと思っています。

ただ、趣旨はともかく、このキャンペーンがお金の支援だけを集めようとするのであれば、好ましいものであるとは言えないと思います。

翻訳を手伝ったり、執筆に協力したりというような参加の方法もあってよいのではないのでしょうか。金がある者は金を出し、知恵ある者は知恵を出せばよいのです。金だけでないキャンペーンにすれば、PLOを支援するためのこのキャンペーンが広がっていくものと思います。

PLO支援のために、また別の提案があります。古本市を組織し、文庫や新書などの書籍バザールを行なったらどうかという提案です。私自身、献本したい古本が何冊もありますし、PLOが呼びかければ、たちまちにバザールが開けるだけの古本が集まることでしょう。いかがでしょうか。（東京都 J・K）

漁夫の利を得る

イスラエル

三月四日の四周年記念を境として、その日以来なんだか急に

忙しくなったように思えますが、その後いかがお過ごしでしょうか。

「PLOの友」銀行口座を開設されたとのお話でしたが、今月も未だに御連絡がないので、第三回分五千円を同封しました。

「ニュース」によると、レバノンの内戦が再発しました。多数の民間人を含む戦死傷者——心が傷みます。内戦の拡大はイスラエルの思うツボ。イスラエルをさらに強化するために間接的に協力しているようなものです。イスラエルに對立する相手勢力の分断、分裂にかけては達人中の達人なのです。まさに、座して漁夫の利を得ているのです。その点ではアラブ各国はイスラエルの発展のために貢献してきたことになりました。長い間、日本流に言えば、よく計画された根まわしのうまさともいえるのでしょうか。一刻も早い收拾を願ってやみません。

「パレスチナの地図」

なお、四月号の、かわさきたかし先生の『日本人の民衆が受けとめるパレスチナ人の運命』の文中51ページ下段、ハリスの物語を不自由な片目で徹夜で



問「わたし、フィラスティン・びらーでい誌の読者ですが、フィラスティン・びらーでの意味はなんですか？」
答「パレスチナ・わが祖国」です。フィラスティン・びらーでい誌にその意味が書いてありますよ」

問「パレスチナへボランティアとして行きたいのですが……」
答「ただ今のところ、医療ボランティア以外は受け付けていませんが、何かそのような資格をお持ちでしょうか？」

問「何もありません。ただ、日本でも仕事は見つからないし、どうせならパレスチナでボランティアでもしようかなと思ひまして……」

答「残念ですが……」
◇◇◇

問「あのー、この電話は盗聴されていますか？」
答「そう思います……」

問「事務所に出入りする人間を何らかの形でチェックしているんでしょうねえー」
答「そう思います」

問「援助したいんですが、名前を出すのは困りますし、見つかった後をつけられるのも困りますし……。何かいい方法が見つかりましたら、また連絡します。」

問「お宅の教団は青葉台のところでしょ？」
答「はい！」

問「近くのバプテスト教会や神霊教の教会は大きいのに、お宅の教団は民家みたいですね」
答「はあ……??」

こちら PLO

03-463-2840

読んだおばあさんの話ですが……

『おばあさんへ、お孫さんと一緒に地球儀をみて「パレスチナ」はなかったそうですね。地球儀ではありませんが、「パレスチナ」の地図が明確に記された地図が私の手元にありますので、コピーして次号五月号と一緒に送ってもらえるようにお願いしておきます。それはキリスト時代よりも、さらにさらに何千年も古い聖書地図なのです。

大の御都合主義で33年も苦難を背負っている「パレスチナ」の人達に関心をお持ちのおばあちゃんに心から敬意を表します（埼玉県 H・I）

「ほんね」と「たてまえ」

本誌の購読を国会議員諸氏に依頼されたそうですが、予想に反して、好返答は僅少だったと……。日本の議員の大半の人たちは、常に頭の中から選挙のことが離れず、次の選挙の得票につながるようなことには、あまり積極的にならないようです。

お詫びと訂正

四月号の制作過程での不注意により、頁の誤りと誤植が多く出てしまいました。不注意を心からお詫びし、次のように訂正します（編集部）
グラビアの最後の頁の右上一九八〇は一九八一。16頁の見出しの「無感心」は「無関心」。20頁下段後から6行目の「思慮の彼方」は「恩讐の彼方」。54頁下段11行目の「サガサキ」は「ナガサキ」。57頁3段9行目を削除。63頁下段中央に見出し「言葉のチェス・ゲーム」を入れる。同頁、下段の後ろから9行目の〇〇〇〇は、The Anatomy of Dependence。77頁の編集長の手紙の一段の最後の行と2段の最初の行を入れかえる。



すまず深まるでしょう。遅々とはありますが、確実に前進しているのです。どうか健康にはくれぐれも留意なさり、頑張ってください。（神奈川県 S・M）

世界史の法廷

フアトヒ・アブドルハミード

パレスチナ人民の国会にあたる、パレスチナ国民評議会（PNC）の第十五会期がシリアのダマスカスで、さる四月十一日から十九日まで開かれ、新しい方針が決定された。終了後のコミニケで強調されたのは、パレスチナ人民の団結があらゆるレベルで深まった点であり、パレスチナ解放のために軍事・政治・経済・社会の各分野におけるたかいたを、この強固な団結を基礎に推進し、独立国家樹立の準備を更に前進させた点である。

そのために、イスラエル占領下でたたかっている同胞にこたえて、祖国の外にいるパレスチナ人たちが総動員体制をしいて総決起を促すとともに、アラブ諸国にも支援と協力をよびかけた。またアメリカに支援されたイスラエルがレバノン南部に対する侵略を強めている最近の情勢の重大性を指摘し、さらに国際政治の舞台でパレスチナの大義を推進して行くことの有効性を認識しつつも、EC諸国の和平努力をも含めて、キャンペーン・デビュー方式を拒否し、PLOをパレスチナ人民を代表する唯一・正統の機関として承認する場合にのみ有効性を持つことを強調した。

この関連では、中東危機の解決のためにPLOが基本的な役割を果たしうる国際会議の

開催を唱えたソ連のブレジネフ提案を歓迎した。最後にPNCのコミニケは、帝国主義とたたかうアジア・アフリカ、ラテン・アメリカの人民との連帯を表明し、国際テロリズム、とりわけ国家テロをおしすすめているイスラエルを非難した。

前回の第十四会期のPNCが開かれた一九七九年の初頭から二年たった今回のPNCでは、PLOの外交活動の成果が高く評価された。外交活動は、ベトナム人民のたたかいによっても示されたように、パレスチナ解放の今日のたたかいでは、特に重要な領域となってきた。『難民の集団』と言われてきたパレスチナ人民の苦難の実相とパレスチナ解放の理念がいかなるものであるのかを世界の良心に伝えてきたのも、国際活動、とりわけ外交活動であった。今日、一一七カ国以上がPLOを承認している。PLOは世界四十カ国以上に大使館を、三十数カ国に代表部を置いているが、これを築いたのは、PLOの外交活動であった。

たしかに、祖国を奪われ、離散を強いられ、本格的な拠点を持たない状況のもとで展開されてきた外交活動は、伝統的な「外交」のカテゴリー内では想像できない複雑な条件

をともなっていた。パレスチナ問題の発生そのものの自体に大きな国際的背景があったために、また、一九四八年五月に「イスラエル」という国家がパレスチナにつくりあげられてから、この国家機構を支援し、パレスチナ人民の抵抗を踏みつぶそうとした勢力が更に巨大で国際的な力を有しているために、PLOの外交活動は、それと対抗できるだけの強靱さと柔軟性と独創性とを常に備えていなければならない。

「世界史は世界の審判者である」と断言したのはドイツの文学者で哲学者のシラーであった。PLOの外交活動は、パレスチナ人民の有する自らの不可侵の権利を守るだけでなく、その主張の尊厳性を世界の諸国人民に想起させ、抑圧者と侵略者たちの許し難い犯罪と悪業の数々を、やがては世界史の裁きの法廷に持ちこむ役割をも担っているのかも知れない。

今回の第十五会期のPNCを通じて、とくに、強く感じられたことは、その可能性がきり開かれたという実感であった。歴史の舞台から、やがて後退してゆくべき運命にある者たちが、テロリズムというレッテルばりの奇怪な合唱をくりかえし、レバノン南部の侵略を強めているという局面の厳しさの中で、PNCを通じて示されたゆるぎない団結は、勝利への確かな道標である。

（パレスチナ解放機構駐日代表）

アラブアト議長は語る

中東地域の形態を決定づけて行くものは、アメリカの艦隊でも緊急展開部隊（RDF）でもなく、それはパレスチナ解放の銃である。なぜならアメリカの艦隊や緊急部隊の運命は、ベトナムで撃墜された四千機の軍用機のたどった運命と何ら変わらないからである。

アラブの連合勢力に結集する戦士たちにとって、いまは困難で危険な時である。なぜなら、シオニストと帝国主義者たちが、われわれの地域に力をおよぼそうとして全面的な策動を強めており、その重要な作戦として、大攻勢をしかけてきており、われわれがこれと対決してゆかなければならないからである。連合勢力は、前衛部隊として、その対決の

先頭に立ち、パレスチナ革命のみならず、レバノンおよび大西洋から湾岸にいたる全アラブ民族の守り手となっている。アメリカとそのイスラエルの手下どもは、パレスチナ革命と、われらアラブの連合勢力をたたきつぶそうとしている。シオニストたちがレバノン南部に軍事攻勢を強め、連合勢力に対して連日におわつて爆撃を行なっている。だが、われわれは、これらの残虐な侵略に毅然として対決し、アラブ民族の尊厳を守り抜く決意である……（中略）。

解放のために、あなた方が放つ銃弾こそが、勝利への道、パレスチナへの道に至る、確かな道標を示してくれるであらうし、その勝利の時に、一人のパレスチナの少年がパレスチナの四色旗を高く掲げるであらう。われらがパレスチナ旗は、伝統あるアラブ民族の旗でもある。

だが、たたかいは困難で長期にわたる。パレスチナ革命を開始した時に、われわれは長期の人民戦争を覚悟していた。そして今年は十七年めに入った。われわれは、パレスチナ革命をたたきつぶそうとする一切の策動をうちくだいてきたのだ。

アラブ民族と全世界の自由を愛する人たちから、われわれが必要なのは、祈りや元気で

いてほしいというあいさつではない。われわれとともに、この最前線であたたかき剣こそ、われわれが欲しているものだ。

一九八一年三月十八日、ベイルートのコマンド・グループの軍事訓練終了式の演説より

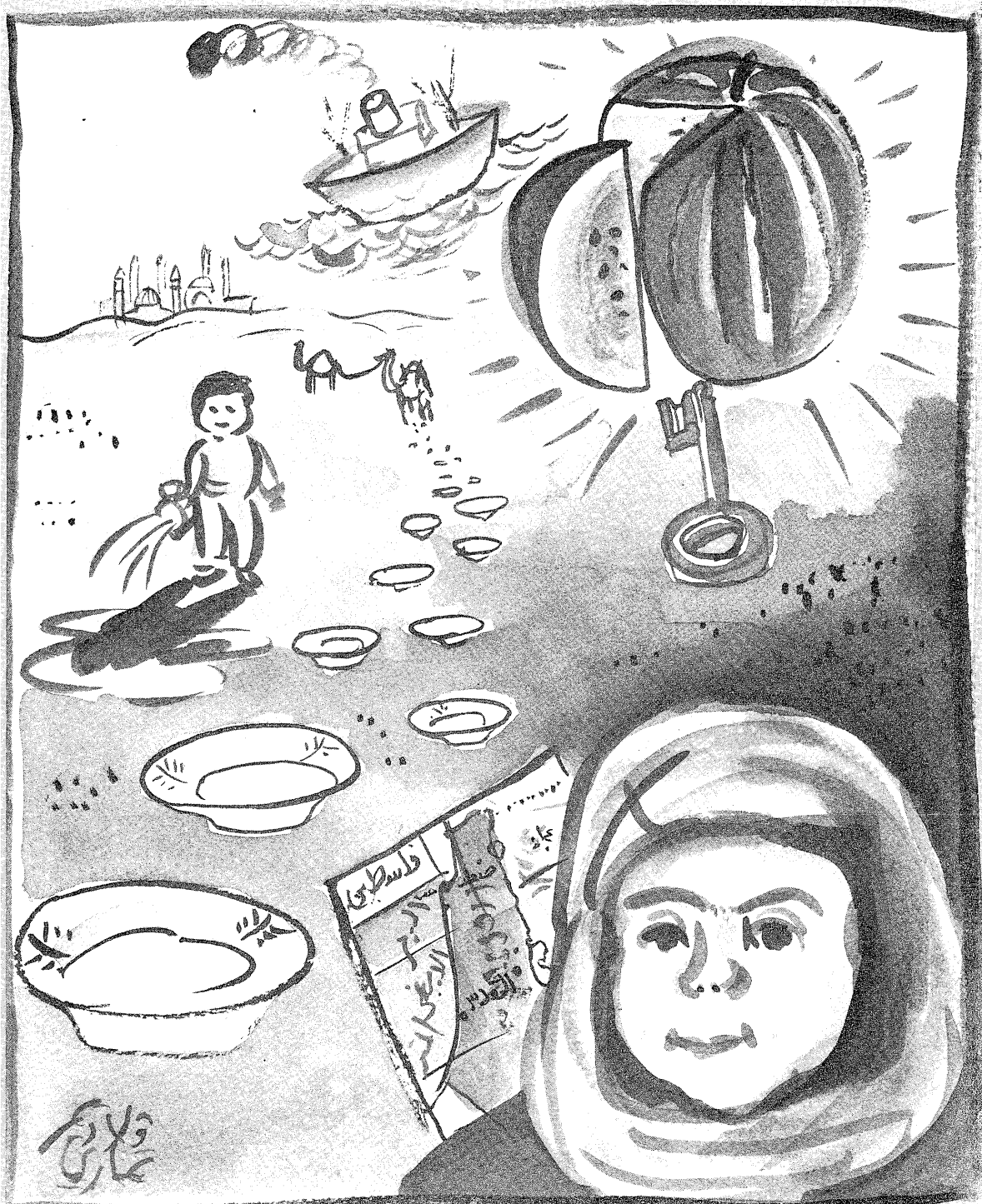
＊ ＊ ＊

われわれが今日ここで一堂に会しているのは、この地域一帯にあるアメリカの常設・移動基地に対決してゆくためである。インド洋、紅海そして地中海にアメリカの三つの艦隊があるが、そのほかにエジプト、ケニア、オマーンに基地をもち更にジェーゴ・ガルシアには核基地を置いており、これによって、この地域の三十六カ国の人民の安全が脅かされているのだ。

レーガン政権は、PLOを「テロリスト集団」と呼んでいる。もし「テロリズム」というものが解放をすすめることを言うのであれば、「テロリズム」にかかわっていることは、われわれの誇りである。……かつては「テロリスト」のレッテルをはられたロバート・ムガベ氏も、今日ではジンバブエの首相ではないか。

一九八一年三月二十二日、アデンで開かれた第十三回アジア・アフリカ人民連帯会議での演説より





パレスチナの子どもたちは、ことばにあやをかけて、なぞなぞ遊びを楽しんでいます。多くは、鋭いイマジネーションを働かせなくては解けません。さあ、ここに5つあります。答えは下段に。 1、緑色の壁に覆われた、黒人が住んでいる真赤な町。そばには鉄の鍵が。 2、それに水をかけても、乾いたまま残ってしまう。3、それは運びます。運ばれてもいます。また、それは濡れています。乾いてもいます。4、パレスチナからコンスタンチノーブルまで続いているスープ皿。それは何？ 5、一滴の水もない川。岩一つ見えない山。何でしょう。

Interview

P L O 統一情報局長

マジッド・アブ・シャラル氏

今回のインタビューにはP L Oの中でも、あらゆる文化、情報、報道などの部門総責任者であるマジッド・アブ・シャラルP L O統一情報局長が登場してもらった。さしずめ文化情報省の大黒格の人であり、同時にP L O傘下最大の組織フタハの中央委員である。アブ・シャラル氏は、ホー・チ・ミンの肖像がある執務室の質素な小さい部屋で、本誌特派員のインタビューに答えてくれた。

——初めに統一情報局の仕事についてお話し願いたいのですが……。

ア氏 統一情報局は、傘下にW A F A (パレスチナ通信)、パレスチナの声放送「パレスティン・アツ・サウラ」(日刊紙)、造形美術部門、映画・写真部、対外情報部(外国のジャーナリストは皆この世話になります)などを持ち、革命の現況を内外に適格に伝え、かつ私たちの目的、大義を知らしめ、さらに新たな民族文化を育成する仕事もします。かつてはさまざまなアラブ諸国の支配や、時には妨害により私たちは、困難な時期もありましたが、今ではP L O独自の主体性を確立しています。

——それではP L Oの使命をお話し願えますか。

ア氏 私たちは、真の平和を獲得するまでは、武装闘争を続けます。真の平和は、パレスチナ人民が、祖国に戻り、独立国家を持つ時に、もたらされるのです。しかし敵イスラエルは、アメリカの全面的支援のもとに、パレスチナ人を人

民とみなすことに反対し、自決権に反対し、祖国に戻ることに反対しています。真の平和に敵対しているのです。

キャンプ・デービッドの合意が、破産したことは御存知でしょう。これは、この地域の問題が、シナイやゴランの占領の問題であって、パレスチナ問題ではないとみなすものでした。つまりそれらの



占領地をアラブに返すことが、問題の解決だと考えたのです。パレスチナ人民は無視し続けようというわけです。

しかしキャンプ・デービッドから二年以上たつて、何が生み出されたでしょう。より多くの戦争、より多くの犠牲者、問題の複雑化です。レバノンの村々が爆撃され、罪のない多くの人々が毎日

死んでいます。

——その中で統一情報局の役割は？

ア氏 私たちが武装闘争を始めたとき、政治、外交の分野での闘争も始めなければなりません。これらは同等に重要なことだったので。私たちが闘争を好むから闘っているのではなく、追放された祖国に戻るためにやむを得ず闘っているのだということを、世界中に理解してもらう必要もありました。私たちの活動の結果、私たちは人民の支持を得、アラブ大衆や世界中の人民の支持を獲得してきています。今ではP L Oは世界に八十二の代表事務所を持ち、そのかなりの数が大使館になっています。国連の過半数の国が、私たちの大義を支持してくれています。アラブ連盟、イスラム会議、非同盟諸国でも、国家代表として扱われています。

——日本に向けて一言を。

ア氏 私たちは日本が戦争によってどんなに犠牲を払ったか知っています。だから平和の大切さを知っている点で、私たちの問題を理解していただけたらと思っています。ただ私たちが平和を得るためには、闘い続けることを強いられるという事も理解していただきたいと思います。

日本政府には、P L Oを承認することを求めています。まだアメリカの圧力のため承認には至っていません。遠からずその日が来ることを確信しています。が、日本人の方からも、政府に働きかけていただきたいと思います。



●PLOの各機関や大衆組織で制作したポスターを紹介します。シリーズの第一回は、本紙二月号のグラビアで特集したサメッド（パレスチナ解放殉難者家族の生産・福祉機関）のポスター（部分）です。

フィラスティン・びらーでい 5月号

1981年 5月20日発行

編集発行人/ファトヒ・アブドルハミード

発行所/PLO駐日代表事務所

〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 Tel. (03)463-2840

印刷所/株式会社 太平印刷社

FILASTIN BILADI MAY 1981 NO. 18

Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director

PLO Office, Japan; TELEX: J27524 FATHI

1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153

●購読料、支援金のお振込みは三和銀行渋谷支店 普通預金口座 345-125793 口座名は、「フィラスティン・ビラーディ」です。